

文部科学省委託 平成30年度初等中等教職員国際交流事業

第一回 エキスパートミーティング・

初等中等教職員国際交流事業報告会&ワークショップ

実施報告書

Entrusted by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) of Japan

Report on 1st Expert Meeting & 2018-2019 Conference on International Teachers Exchange Programme

東京都 Tokyo

2019年2月22日(金) — 2月23日(土)

22nd February-23rd February, 2019

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において人材育成と相互交流を推進する事業を行っています。

当センター国際教育交流部は、主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。本事業に参加した、いわば「親善大使」である教職員の積極的なプログラムへの参与、および参加後の国際交流活動等により、各国間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

このたび、2019 年 2 月 22 日から 23 日にかけて、当センター初の試みとして、本事業にかかる専門家会議（エキスパートミーティング）ならびに事業報告会&ワークショップを実施しました。初日の専門家会議では、国内外から国際交流事業の企画・運営に携わる担当者や専門家が集い、これまでの各国における教職員国際教育交流プログラムの成果を振り返るとともに、関係国間での情報共有を行いました。翌 23 日には国内の一般公募によって集った参加者も加わり、「多様性をちからに～教育実践者による国際理解とは」というテーマのもとで、国内外の専門家からの講義、本事業に参加・協力いただいた教職員によるプレゼンテーション、ワークショップを実施しました。これらの活動により強化された関係者間のネットワーク、教育現場での国際交流活動の事例共有、多様な参加者による各学校・教職員に対するフィードバックが、参加したすべての方にとって、これからの国際交流活動による相互理解と友好関係をさらに深めていく一助となることを期待しています。ACCU は、今回の学びを糧に、これからも国内外の多様な関係機関の皆さまとともに、より質の高い国際交流事業の運営と多くの方への機会提供に尽力してまいります。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2019 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

Preface

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), in line with the principles of UNESCO, promotes regional cooperation and exchange programmes in the field of education and culture with the people of the Asia-Pacific region that contributes to the realization of a peaceful and sustainable society where cultural diversity is duly respected.

In 2001, the ACCU initiated the International Educational Exchange Programme to promote mutual understanding and friendship between countries mainly in the Asia-Pacific region in partnership with the Government of Japan and the United Nations University (UNU). Through the programme, which has been organised among Japan and South Korea, and China, and Thailand and India, almost four thousand teachers have been invited to Japan, and more than one thousand Japanese teachers have been invited to those countries. These programmes have made great contributions not only to facilitating exchanges between teachers and between schools but also to friendship and mutual understanding between participant countries.

On this occasion, from February 22 to 23, 2019, the 1st Expert Meeting and 2018–2019 Conference on the International Teachers Exchange Programme were held for the first time by the ACCU. On the first day, February 22, programme organisers and experts from inside and outside of Japan met and reviewed the outcomes of the International Teachers Exchange Programme to exchange their knowledge and experiences. The following day, February 23, lectures by experts, presentations by participants of past programmes, and a workshop were carried out to share the good practices, challenges in schools, and feedback with the experts and the participants invited by public subscription. We hope that this opportunity helps to strengthen networks among stakeholders and deepen mutual understandings and friendships. We also take this opportunity to encourage ourselves to organise qualified programmes and provide a broader range of opportunities for international exchange in cooperation with our partners.

In the end, we are deeply grateful to all of our important partners for their assistance and cooperation in implementing this programme.

March 2019

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

目 次

Contents

1. プログラム概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
Programme Outline	
2. 実施内容	
(1) 第1回エキスパートミーティング・・・・・・・・	15
1st Expert Meeting	
(2) 初等中等教職員国際交流事業報告会 & ワークショップ・・・・・・	46
2018-2019 Conference on	
International Teachers Exchange Programme	
3. 参加者アンケート・・・・・・・・・・・・・・・・・・	88
Feedback from participants	
付録 Annex	
プログラム写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・	95
Photo album	
平成30年度プログラム実績・・・・・・・・・・・・・・・・	101
Programme record in 2018-2019	

1. プログラム概要

Programme Outline

1. ACCU が運営する教職員国際交流プログラムについて

ユネスコ・アジア文化センターが企画・運営する教職員国際交流事業は、主にアジア太平洋の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府や国連大学の協力のもと、2001 年韓国との間で開始しました。本事業は、現在、日本と韓国のみならず、中国、タイおよびインドとの間で実施され、これまで 4 千人近くの海外教職員を日本に招へいし、また日本からも 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。

本事業は、日本の教育制度、教育政策や良い実践例を相手国に紹介すること、また日本の参加者が相手国のそれらを学ぶこと、そして相互の交流により、日本とアジア太平洋地域の教職員が互いに学びあい、互いの文化への理解を深め、教育者としての価値観に変化をもたらすことを目指しています。プログラム期間中、教職員は、学校やその他の教育文化施設への訪問やワークショップへの参加を通して、意見交換し、経験を共有し、相互理解を深めることができます。さらには、プログラム参加後、自身の教育現場においてプログラムからの学びを児童・生徒や同僚に伝え、将来を担う子供たちの豊かな学び、さらには平和な社会の構築へ大きく貢献してきました。

2. 実施背景

ACCU による教職員国際交流事業は、開始から約 20 年間継続して行われ、これまでに国内外で約 5 千人以上の教職員が参加しています。この度、当センター初の試みとして、これまでの経験や知識を共有し、多国間のネットワークを構築する機会を提供することを目指し、エキスパートミーティングおよび初等中等教職員国際交流事業報告会&ワークショップを実施いたしました。

エキスパートミーティングにおいては、当センターとカウンターパート国となる韓国、中国、タイ、インドより本事業の企画・運営者と専門家を招き、カンントリーレポートとして、発表を行い、それぞれの国がこれまでの交流事業や持続可能な開発のための教育（ESD）、地球市民教育（GCED）推進に携わる中で得られた経験や知識を多国間で共有し、各国の視点でこれまでのプログラムを統括し、課題や展望を含めて共有する機会としました。初等中等教職員国際交流事業報告会&ワークショップにおいては、過去のプログラム参加者が自身の参加経験や変容を共有し、専門家のフィードバックを得ながら、本事業の学校現場における成果の還元や課題を振り返る機会としました。さらには、ワークショップを通じて、プログラム企画・運営者、専門家と、日本国内の一般公募によって集った教職員が共に、教育現場における国際交流が多文化共生社会の実現に向けてどのように寄与するか、ESD（持続可能な開発のための教育）や地球市民教育、国際理解教育をどのように実践するかを考える機会としました。

3. 目的

- 3.1 エキスパートミーティングにおいては、異なるバックグラウンドを持つプログラム企画・運営者と専門家が専門的知識・見解を共有し、教職員国際交流プログラムの意味づけを確認し、プログラム内容のさらなる深化を図る。
- 3.2 現在、各プログラムは2国間で行われているが、5か国（日本・韓国・中国・タイ・インド）のプログラム企画・運営者および専門家が一同に会し、多国間のネットワークを構築する。
- 3.3 教職員国際交流事業報告会&ワークショップにおいては、過去のプログラム参加者が自身の経験、変容を共有し、本事業の可能性やニーズを探るとともに ESD（持続可能な開発のための教育）や地球市民教育、国際理解教育の実践方法を学ぶ。

4. スケジュール

日 程：2019 年 2 月 22 日（金） 会 場：出版クラブビル会議室、東京都千代田区 参加者：18 名	
Time	Contents
15:00 -15:20	開会と導入
15:20 -16:50	カントリーリポート 韓国ユネスコ国内委員会 Seo Hynsook タイ教育省 Supranee Khamyuang インド環境教育センター Santosh R. Sutar
16:50 -17:00	休憩
17:00 -17:20	講演 中国ユネスコ ESD 実務委員会 Shi Gendong
17:20 -18:00	ディスカッション・コメント

日 程：2019 年 2 月 23 日（土） 会 場：ベルサール八重洲、東京都千代田区 参加者：34 名	
Time	Contents
9:30-09:50	開会挨拶 ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部長 進藤 由美
9:50-10:20	基調講演「持続可能な社会のための国際理解・平和構築における教員交流の役割」早稲田大学大学院教授 黒田 一雄
10:20-11:50	プログラム参加者、訪問校からの報告 徳島県上板町立高志小学校 教諭 富樫未来 石巻市立鮎川小学校 教頭 畠山政明 (休憩) 神奈川県立有馬高等学校 教諭 半澤ゆかり 東京都立石神井特別支援学校 主任教諭 町田直美
11:50-12:50	昼食
12:50-13:30	講義 APCEIU 事務局長 Utak Chung
13:30-14:00	導入「地球市民教育と多文化共生ーユネスコが提唱する多文化共生への教育イニシアティブ」玉川大学教授 小林 亮
14:00-16:15	ワークショップ（休憩あり）
16:15-16:45	参加者からコメント
16:45-17:00	閉会、記念撮影

（敬称略）

5. 参加者リスト

事業企画・運営者、専門家

韓国ユネスコ国内委員会 教育部 部長 Seo Hyunsook,
ユネスコ・アジア太平洋国際理解教育センター 事務局長 Utak Chung
ユネスコ・アジア太平洋国際理解教育センター アシスタントプログラムスペシャリスト
Rigoberto D. Banta Jr.
中国ユネスコ ESD 実務委員会 事務局長 Shi Gendong
中国ユネスコ ESD 実務委員会 Guo Ruifeng
タイ教育省 二国間協力ユニット 部長 Supranee Khamyuang
タイ教育省 外交部 Kanokwan Kwantinpu
インド環境教育センター 地域事務局長 Santosh R. Sutar
早稲田大学大学院アジア太平洋研究科 教授 黒田 一雄
玉川大学教育学部 教授 小林 亮

発表者

徳島県上板町立高志小学校(徳島県) 教諭 富樫未来
石巻市立鮎川小学校(宮城県) 教頭 畠山政明
神奈川県立有馬高等学校(神奈川県) 教諭 半澤ゆかり
東京都立石神井特別支援学校(東京都) 主任教諭 町田直美

一般公募

11 名（教職員）

運営（ACCU）

国際教育交流部長 進藤 由美
教育協力部長 大安 喜一
国際教育交流部 事務専門員 高松 彩乃
国際教育交流部 事務専門員 河口 枝里子
国際教育交流部 事務専門員 伊藤 妙恵
国際教育交流部 事務専門員 岡野 晃一
国際教育交流部 事務専門員 藤澤 弥生
国際教育交流部 プロジェクトスタッフ 天満 実嘉

（敬称略）

1. About the International Teachers Exchange Programme of ACCU

Aiming to promote human capacity development and mutual understanding of teachers mainly in Asia and the Pacific region through exchange of teachers, scholars, professionals, and administrators, the "Programme for International Educational Exchange of Teachers and Professionals" was started in 2001 first with South Korea. Since then within the framework of the Programme, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU), as an implementing organisation for UNU and MEXT, has been organising the "Invitation Programme for International Educational Exchange of Teachers and Professionals". In 2010, the Project was re-named as International Educational Exchange Programme and has been developed and expanded as bilateral exchange with ACCU's counterparts not limited to South Korea and China but with Thailand and India now.

The purpose of the International Teachers Exchange Programme are; to introduce the Japanese educational system, policies and good practices to counterpart countries' participants and vice versa for Japanese participants to understand those of counterpart countries'; to provide teachers in Asia-Pacific countries and those in Japan with opportunities to deepen their learning, understand multiple different cultures and to bring about and to develop transformation of teacher's core value through participation in the programme and interaction with each other. During the programmes, teachers and administrators exchange opinions, share views and experiences on educational subjects of mutual interest through visits to schools and other educational and/or cultural institutions, and workshops; and to eventually promote mutual understanding and friendship to build a peaceful society.

2. Background of the Expert Meeting and Conference

The International Teachers Exchange Programme has been implemented for nearly 20 years, and more than 5 thousand teachers have participated in this programme. This year, we organised this Expert Meeting and Conference on the International Teachers Exchange Programme for the first time to provide opportunities for all counterparts to get together to share their experiences and knowledge and to develop a multilateral network.

For the expert meeting, programme organisers and experts from the international exchange programme from the counterpart countries (South Korea, China, Thailand, and India) and Japan got together for the first time, and each country presented country reports to share their experience and knowledge regarding improving and further developing the programme. For the conference, Japanese participants from the past programmes shared their experiences, transformations, and feedback to review the outcomes of and challenges in this programme. Additionally, all participants

including programme organisers, experts, and teachers invited by public subscription collaborate regarding how international exchange programmes can contribute to realizing multicultural symbiosis societies, and how to implement the GCED (Global Citizenship Education), EIU (Education for International Understanding), and ESD (Education for sustainable development) in classes.

3. Purpose and Objectives of the Expert Meeting and Conference

- 3.1 For the expert meeting, the objectives are to share the knowledge of each expert, with their various backgrounds and areas of expertise, to add value to the programme and to reinforce the programme content.
- 3.2 Currently, each exchange programme is run bilaterally; therefore, through this opportunity, the programme will be able to develop a multilateral network of teachers from 5 countries.
- 3.3 For the conference on the international teacher's exchange programme, participants share their experiences and transformation and consider future capital development.

4. Schedule

Date: 22nd February 22, 2019	
Venue: ACCU, Tokyo Japan	
Participants: 18, including experts and organisers (listed below)	
Time	Contents
15:00–15:20	Welcome Remarks and Introduction by ACCU
15:20–16:50	Country Reports by Ms. Seo Hynsook, KNCU Ms. Suprannee Khamyuang, Ministry of Education Thailand Mr. Santosh R. Sutar, CEE
16:50–17:00	Break
17:00–17:20	Knowledge sharing by Dr. Shi Gendong, Chinese National Working Committee for UNESCO on ESD
17:20–18:00	Discussion and Comments

Date: February 23, 2019	
Venue: Belle Salle Yaesu, Tokyo, Japan	
Participants: 34, including public subscription, the presenter, experts and organisers	
Time	Contents
9:30–09:50	Welcome remarks by ACCU
9:50–10:20	Key Note Speech by Professor Kazuo Kuroda
10:20–11:50	Presentation by Ms. Miku Tomigashi, Takashi Primary School Mr. Masaaki Hatakeyama, Ayukawa Primary School (Break) Ms. Yukari Hanzawa, Arima High School Ms. Naomi Machida, Shakujii Special Needs Education School
11:50–12:50	Lunch Break
12:50–13:30	Lecture by Dr. Utaik Chung, Director, APCEIU
13:30–14:00	Key Note Speech by Professor Makoto Kobayashi
14:00–16:15	Workshop facilitated by Professor Kobayashi
16:15–16:45	Comments by the Participants
16:45–17:00	Closure

5. List of Participants

PROGRAMME ORGANISERS and EXPERTS

Ms. Seo Hyunsook, Director, Division of Education, Bureau of Education, Korean National Commission for UNESCO (KNCU)

Dr. Utak Chung, Director, Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding (APCEIU)

Mr. Rigoberto D. Banta Jr., Assistant Programme Specialist, APCEIU

Dr. Shi Gendong, Executive Director, Chinese National Working Committee for UNESCO on ESD

Mr. Guo Ruifeng, Chinese National Working Committee for UNESCO on ESD

Ms. Supranee Khamyuang, Chief of Bilateral Cooperation, Ministry of Education

Ms. Kanokwan Kwantinpu, Foreign Relations Officer, Ministry of Education

Mr. Santosh R. Sutar, Regional Director, Centre for Environmental Education (CEE)

Mr. Kazuo Kuroda, Professor, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University

Mr. Makoto Kobayashi, Professor, Tamagawa University

PRESENTERS

Ms. Miki Tomigashi, Teacher, Takashi Primary School, Tokushima Prefecture

Mr. Masaaki Hatakeyama, Vice-principal, Ayukawa Primary School, Miyagi Prefecture

Ms. Yukari Hanzawa, Teacher, Arima High School, Kanawaga prefecture

Ms. Naomi Machida, Senior Teacher, Shakuji School for Special Needs Education, Tokyo

PUBLIC SUBSCRIPTIONS

11 teachers and education administrators

ORGANISERS (ACCU)

Ms. Yumi Shindo, Director, International Educational Exchange Dept

Mr. Kiichi Oyasu, Director, Education Cooperation Dept

Ms. Ayano Takamatsu, Programme Specialist, International Educational Exchange Dept

Ms. Eriko Kawaguchi, Programme Officer, International Educational Exchange Dept

Ms. Tae Ito, Programme Specialist, International Educational Exchange Dept

Mr. Koichi Okano, Programme Specialist, International Educational Exchange Dept

Ms. Yayoi Fujisawa, Programme Officer, International Educational Exchange Dept

Ms. Mika Temma, Project Staff, International Educational Exchange Dept

2. 実施内容

Programme Contents

(1) 第 1 回エクスパートミーティング

1st Expert Meeting

開会と導入

Welcome Remarks and Introduction

開会にあたって、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）国際教育交流部部長の進藤由美より、参加者全員に対して歓迎の言葉が送られ、また本会開催の背景について説明が行われた。

これまで ACCU が企画・運営に携わってきた教職員国際交流プログラムは 2 国間の事業である。今回初めて、ACCU のコーディネートの元、点と点を結ぶような形で、多国間の集まりが実現することとなった。開会に先駆けて、大切なパートナーやアドバイザーである参加者全員への歓迎と感謝の言葉が述べられた。

また、本事業の主役は「教職員」であることが語られた。教職員は子どもたちに影響を与え、子供たちは家族に、そして家族からは地域コミュニティや社会に影響を与える。教職員は社会の変化の源ともいえる、いわば「チェンジメーカー」である。その教職員が国際交流プログラムに参加し、実際に海外の教育現場を視察することによって、自身の価値観に変化をもたらし、さらには、相手国との相互理解の促進や友好関係の構築がなされ、平和で持続可能な社会の実現に貢献していけると、教職員国際交流プログラムの重要な意義が語られた。

この第 1 回エキスパートミーティングにおいては、5 か国間でこれまでの経験や知識を共有することで、プログラムの価値や内容をさらに強化すること、また、教職員間の国際交流をさらに促進させていくことを目的としていることが確認された。

As the welcome remarks, Ms. Yumi Shindo, Director of the International Educational Exchange Department, ACCU, conveyed her warm welcome to and appreciation for the all participants who are critical partners and advisors for the ACCU and reviewed the background of the Expert Meeting and Conference.

She explained that, currently, each exchange programme is run by bilaterally; therefore, this is the very first opportunity to have a multilateral conference coordinated by the ACCU.

Additionally, she went on to say that the International Teachers Exchange Programme focuses on “teachers” and explained that teachers influence children, children influence their parents, and parents influence communities and societies. In this sense, teachers are the origin of social transformation and, ultimately, “change makers.” She confirmed that the aim of the International Teachers Exchange Programme is to contribute to developing teachers’ core values and to promote mutual understanding and friendship to build a peaceful and sustainable society.

She informed of the participants about the objectives of this 1st Expert Meeting: to share multiple and diversified knowledge and experiences to add value to the programme, to reinforce the programme context, and to develop a multilateral network of teachers from five countries.

カントリーリポート Country Reports

Ms. Seo Hyunsook: 韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）教育部部長 Director, Division of Education, KNCU

初めに、韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）教育部部長のソ・ヒョンスク氏より次のようなカントリーリポートがなされた。韓国では、ヒョンスク氏の発案により日本との教職員交際交流プログラムを“Korea-Japan Teachers’ Dialogue Programme”と呼び、「交流」ではなく「対話」という言葉で、双方が互いに対話を通して理解を深めていくプログラムであることを強調してきた。その名前の通り、過去 19 年間一度も途絶えることなく、毎年、日韓の教職員は互いの国を訪れ市民レベルの交流・対話を続けてきたことが共有された。

2001 年のプログラム開始当初は国際理解教育（EIU）を大きなテーマとしていたが 2005 年頃から EIU に加えて地球市民教育（GCED）や持続可能な開発のための教育（ESD）等にも焦点が当たるようになってきたと、19 年間の間でのプログラムの変化が語られた。韓国内の参加者の選考プロセスや評価方法が共有されたのち、このプログラムの成果として、（１）教授法の向上（２）相互の強いパートナーシップの構築（３）ASP ネットへの関心の向上という 3 つの成果、また SDGs ゴール 4.7 へも貢献していることが話された。また、一方で今後への展望として、長期的なプランや評価方法の確立等といった改善案が提案された。



発表を行うヒョンスク氏

The first country report was presented by Ms. Seo Hyunsook, Director of Division of Education, Korean National Commission for UNESCO. In South Korea, this International Teachers Exchange Programme with Japan is called the “Korea-Japan Teacher’s Dialogue Programme,” based on the suggestion of Ms. Hyunsook. Using the word “dialogue” instead of “exchange,” they have been emphasizing that the programme is for deepening mutual understanding through dialogue. Literally, South Korean and Japanese teachers have visited each country and have continued dialogues at the citizen level without cessation for the past 19 years. She talked about the changes in the programme during the past 19 years. For example, when the programme started in 2001, its main theme was EIU; however, since mid-2000s, the theme has been GCED and ESD. After she talked about the selection process and evaluation criteria, she mentioned the outcomes of the programme: (1) development of teaching methods, (2) strengthened and multifaced partnerships, and (3) increased participation in ASPnet activities. She added that the programme contributes to SDG’s goal 4.7 as well. In the end, she suggested developing a long-term plan and evaluation method, and so forth, to improve the programme.

Ms. Supranee Khamyuang: タイ教育省 二国間協力ユニット部長 **Chief of Bilateral Cooperation, Ministry of Education**

続いて、タイ教育省 二国間協力ユニット部長のスプラニー カムユアン氏よりカントリーレポートが行われた。タイと日本の教職員国際交流プログラムは、2015 年から始まり、これまでにタイ教職員の日本への派遣を3年間、日本の教職員のタイでの受け入れを1年間、毎年行ってきた。本プログラムは、タイで教育省が管轄する唯一のプログラムとして今後も継続、発展させていきたい旨が話された。

タイ教職員の日本への派遣プログラムにおける特徴として、タイ国内での教職員の選考プロセスでは、日本に一度も、あるいは殆ど行ったことがないことが第一条件であることや、タイ国内の多様な地域からメンバーを集めていることなどが共有された。日本での経験はタイの教職員にとってとても印象深いものであり、この交流プログラムをきっかけに2016年に姉妹校提携を結んだ学校が2校あることが成果として挙げられた。

また、2018年から始まったタイでの日本教職員受け入れでは、5人の教職員を受け入れ、タイの学校現場を視察し、印象的な滞在期間となったことが話され、次年以降も継続していきたい旨が語られた。

今後、計画段階でプログラムの中心となるトピックを絞ることで、より意欲の高い参加者を集め、内容の濃いプログラムにしていけることが話し合われた。



スプラニー氏（右）と同僚のカノクワン氏（左）

Next country report was given by Ms. Supranee Khamyuang, Chief of bilateral cooperation, Ministry of Education Thailand. She explained that the International Teachers Exchange Programme with Thailand and Japan started in 2015, and groups of Thai teachers have been dispatched to Japan annually for 3 years. Instead, a group of Japanese teachers was invited to Thailand in 2018. She said that the Ministry of Education Thailand is willing to continue and develop the programme as only one international teacher's exchange programme which they take care of.

She explained some characteristics of the programme in Thailand, that is, the primary condition for participation is to have never or have hardly visited Japan, and the Ministry select members from diverse regions across Thailand through a selection process. She said that the experiences in Japan have been very impressive for Thai teachers and enabled them to extend partnerships between the two countries. She shared the outcomes that, in 2016, two schools made sister school agreements with Japanese schools because of the programme.

Regarding the invitation programme for Japanese teachers, she said that five Japanese teachers were invited to Thai schools and had an impressive stay in 2018. She added that they are willing to continue the programme.

At the end of the session, they discussed to put specific key topics in the stage of planning so that keener participants can be selected and enrich the programme contents.

Mr. Santosh R. Sutar: インド環境教育センター (CEE) 地域事務局長 **Centre for Environment Education (CEE), Regional Director**

続いて、インドにおける ACCU のカウンターパートであるインド環境教育センター (CEE) のサントシュ・スター氏より、インドのカントリーレポートが行われた。サントシュ氏の報告は、まず基礎情報としてプログラム関係機関の概要、インドの教育制度、教育の特色などについて触れた。その上で、2016 年から開始されたインド教職員招へいプログラムの概要、効果／成果、課題と展望について説明があった。

プログラムの効果／成果としては、2018 年のプログラム参加者 14 名は各々の教育現場でプログラムからの学びを 3,500 名の生徒、1,200 名の同僚、および 220 名の学校管理職に伝え、また 8 つの地元メディアによりプログラムが取り上げられるなどして、大きな波及効果をもたらしたことが述べられた。また、参加者の思考態度へのインパクトについても、持続可能性や ESD への関心が高まった、教育に対する情熱が増した、アクティブラーニング・道徳教育・教授態度など日本で見た教育に感化された、ということが語られた。

最後に今後の課題と展望として、次のような事が述べられた。まず、プログラムからの学びを生かすには、政策立案者を巻き込んだプログラムを実施することが効果的であるという提案があった。また、持続的な交流を育むためには、プログラムに参加した日印教職員およびインドの教職員同士のネットワークを維持するためのプラットフォーム作りが求められる点が示された。さらに、将来的にはインド政府による日本教職員招へいプログラムの実施や、生徒同士の国際交流事業を実施したい旨が語られ、今後の日印交流が発展する兆しが見られた。

Mr. Santosh Sutar, from Centre for Environment Education (CEE) of India, has given a country report representing his country. At first, he shared some basic information such as the stakeholders of teacher's exchange programmes and characteristics of India's education system. Then, he presented an overview, effects and outcomes, and challenges and future prospects of the programme.

He showed the impact and outcomes of the programme by using an example that 14 programme participants in 2018 have disseminated their experiences and learning from the programme to more than 3,500 students, 1,200 colleagues, and 220 school administrators. He also said that the programme was taken up by eight outlets of the local media in India and that there was a great ripple effect to many Indian people. He also mentioned the impacts on the attitudes of participants, that is, they became more interested in sustainability/ESD, have more passion for education, and were inspired by what they saw in Japan, such as active learning, ethic education, teaching attitudes.

Last, he told us about the challenges and future prospects as follows. First, he suggested that organizing programmes for policymakers is an effective way of utilizing the learning from the programme. Also, he suggested creating a platform to sustain network among Japanese and Indian teachers for fostering sustainable exchanges. At last, he added that he is willing to start an invitation programme for Japanese teachers and exchange programme for students, which showed a good sign that India-Japan exchange advance in the future.

講演 Knowledge Sharing

Mr. Shi Gendong: 中国ユネスコ ESD 実務委員会 事務局長 Chinese National Committee for UNESCO on ESD, Executive Director

最後に、中国ユネスコ ESD 実務委員会事務局長のシ・ジェンドン氏より講演をしていただいた。

冒頭、中国国内では持続可能な開発のための教育（ESD）は、1998 年より導入されており、この 20 年間は中国の教育史においても大変重要な一章となっていることが語られた。

そのうえで、この 20 年間での成果として、カリキュラムや教授法を含む ESD に関連する研究の推進や政府への助言などを通して、ESD 実践校、実践地域の増加、発展や教員の専門的成長に貢献してきたことが紹介された。また、さまざまな社会団体、博物館、企業などが協力同盟を結ぶほか、雑誌やウェブサイトなどにおいても情報収集や情報公開のためのプラットフォームを確立してきた。さらに、国内外の専門家によるネットワークも確立されている。

中国国内には約 20,000 校の ESD 推進校があり、より多くの学校が他国の学校と交流できればと締めくくった。

Finally, a lecture was given by Mr. Shi Gendong, Executive Director of the Chinese National Committee for UNESCO on ESD. He started the lecture by mentioning that ESD was introduced in 1998 in China and the past 20 years has been a critical chapter in Chinese education history,

He presented ten achievements for the past 20 years such as promoting researches on ESD related topics including curriculum and pedagogies which has contributed to increasing the number of ESD experimental schools and districts in China and professional growth of teachers. Also, an ESD alliance among stakeholders such as social organisations, museums, and enterprises was established, and communication platforms in magazines and on websites to share information were established as well. Moreover, networks among domestic and international experts were built.

He concluded that there are almost 20,000 ESD schools in China, and wishes more of those schools would establish strong relationships with foreign schools.



大分教育協力部長（右）と握手を交わすジェンドン氏（左）

ディスカッション、コメント Discussion and Comments

プログラムの評価方法について

日本と韓国においては、参加した教員による本プログラムの評価は行われているが、現在のところ参加した教職員の生徒たちへの調査は行われていない。すでに行われた調査で集められた情報をプログラムの評価や改善のためにどう活用していくのか、またプログラムそのものだけでなく、その影響に対する評価方法や実施を検討することが必要ではないか。今回のようなエキスパートミーティングを含めて、定期的に関係者が集まり評価、検討していくことも一つの手段。この会議を順番にホストしていくのはどうか。

参加した教職員間のパートナーシップを維持していく方法について

プログラムを単発的なものではなく、持続可能な影響をもたらすものにしていくために参加した教職員間のパートナーシップを維持していくことが必要。姉妹校協定が締結されることは一つのよい方法であり、プログラム参加をきっかけに締結された実績が多くある。交流の基盤を確立すれば、より多くのことを共有でき、互いに学び合うことができる。

短期の教職員交流の質を高めるには

現在、約1週間の短期プログラムが行われているが、その効果を高めるにはどうしたらよいのか。学校訪問だけでなく、ワークショップ等を通して深い議論を行うことも有効ではないか。また、ビザ等の法整備も必要となるが、短期にこだわらず、1~2か月もしくは学期単位の長期のプログラムを作り、教員交換を行うのもよい方法としてあげられる。APCEIUでは既にいくつかの国の間で長期プログラムを実施していることも共有された。

About the programme evaluation

In Japan and South Korea, a survey is conducted to teachers but there is no survey to their students to see impact of the programme so far. It is necessary to develop the way to make a good use of those information and the evaluation system itself in order to improve and develop the programme. It is also good way to have this Expert Meeting among the related parties and share information and evaluate the programme regularly by hosting it in turn.

How to maintain partnerships among the participants of the programme

To make the programme result in a sustainable impact, it is critical to maintain the partnerships among participants of the programme. A lot of schools made sister school agreements because of participation in the programme, and it is a good way to do that. Other forms of the platform that allows schools to share and learn more are necessary.

How to improve quality of the short-term exchange programme

Currently, the duration of most of the programmes is approximately one week. We discussed how we could improve the quality of the short-term programme and suggested conducting workshops to deeply discuss education. Although the legal frameworks are necessary as a precondition, it is also suggested to make a long-term international exchange program for teachers which last for from 1 to 2 months or semesters. The APCEIU shared that they already have a long-term program with several countries.

成果 Outcomes

- (1) これまでの教職員国際交流プログラムの振り返りを行った。
- (2) 各国の現状を多国間で共有した。
- (3) 今後のプログラム展開にむけて多国間で情報交換がなされた。
- (4) 多国間で事業実施者および専門家間のネットワークが構築された。
- (5) 交流プログラムが教育現場での相互理解の促進、パートナーシップの強化に有効であることが共有された。
- (6) 交流プログラムの長期的プランや評価方法、参加した教職員間のネットワークの維持方法を確立し実践していく必要性が共有された。



会議の様子

- (1) Looked back the history of the international teacher's exchange programmes.
- (2) Shared current situation of each country.
- (3) Exchanged information for further development of the programmes.
- (4) Built multinational network among the organisers and experts from the five countries including Japan, South Korea, China, Thailand, and India.
- (5) Shared the importance of international teachers exchange programs in promoting mutual understanding and strengthening partnership at the citizen level.
- (6) Shared needs regarding elaborating long-term plans, evaluation methods, and communication platforms among participants of the programmes.



談笑する小林氏（左）とヒョンスク氏（右）



談笑する ACCU 職員(左)とサントシュ氏（右）

Welcome !

1st Expert Meeting and 2018-2019 Conference on International Teachers Exchange Programme

22nd – 23rd February 2019
ACCU, Tokyo Japan



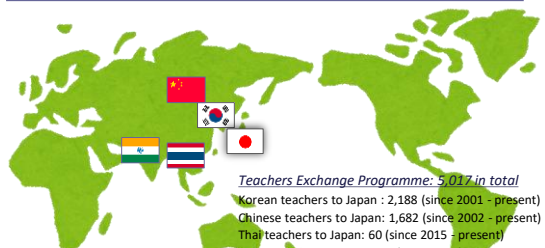
Introducing Experts

- ACCU's Counterparts for the International Teachers Exchange Programme
 - KNCU, Thailand Ministry of Education and CEE
- Knowledge Sharing by Academies and Scholars and of practitioners on Education for International Understanding and peace building for the sustainable development
 - Dr. Utak Chung, Dr. Shi Gendong, Professor Kobayashi and Professor Kuroda

Schedule of the day

- 3:00 Welcome remarks and Introduction by ACCU
- 3:20 Country Reports by
 - Ms. Seo Hyunsook, KNCU KOREA
 - Ms. Supranee Kwantinpu, Ministry of Education THAILAND
 - Mr. Santosh R. Sutar, CEE, INDIA
- 4:50 Break time
- 5:00 Knowledge Sharing by
 - Dr. Shi Gendong, Chinese National Working Committee on ESD, CHINA
- 5:20 Discussions on thinking the value of the programme
- 5:40 Comments by
 - Dr. Utak Chung, Professor Kobayashi and Professor Kuroda
- 6:00 Closing
- 6:30 Dinner

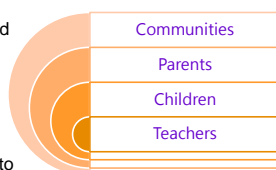
International Teachers Exchange Programme



Background of International Teachers Exchange Programme

- We focus on teachers → They are the change makers
- Through the programme, to develop the understanding of different cultures, societies and people living
- To develop transformation of teacher's core value
- To promote mutual understanding and friendship to build a peaceful and sustainable society

Transformative Learning



Objectives of this Expert Meeting

- To share the multiple and diversified knowledge in order to add value to the programme
- To reinforce the programme context
- To develop a multilateral network of teachers for five countries and more





WELCOME TO ACCU

1st Expert Meeting

International Educational Exchange Programme



February 22, 2019



International Exchange Programme

Exchange Teachers Programmes for Teachers


Over view

Targets Primary and Secondary School Teachers

Aims


- To Learn each others' educational system
- To Improve the quality of education by exchanging teaching experiences
- To build and reinforce networks among teachers
- To promote mutual understanding and friendship

Schedule	Contents
Day 1	Arrival, Orientation
Day2	Lecture on Education policies and system
Day3-5	School Visits
Day6	Cultural experience, Interact Work shop
Day7	Departure




International Exchange Programme


Dispatch Programme for Japanese Teachers to KOREA, CHINA and THAILAND



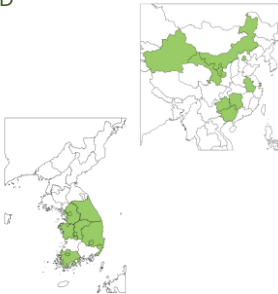
CHINA in June
374
(since 2003 -present)




KOREA in July
665
(since 2003 -present)



THAILAND in August
5
(since 2018 -present)





International Teachers Exchange Programme


Process of Selection for Japanese Teachers

1. Targets

- Primary and secondary school teachers in all over Japan. (not limited to ASPnet School only)


1. Criteria

- Language ability and Health condition and so on.
- Objective and expectation of the programme, future design in their school, interest of visiting country's education, and strong will to have international exchange
- Balance of the school type and ages among participants




International Exchange Programme


Invitation Programme for Teachers from KOREA, CHINA, THAILAND and INDIA




INDIA in October
43
(since 2016 -present)




CHINA in November
1,682
(since 2002 -present)



THAILAND in Late November
60
(since 2015 -present)



KOREA in January
2,188
(since 2001 -present)





International Teachers Exchange Programme

Courtesy call to the government

Lecture on education policies and systems




Interests



- Special needs education
- Quality of education between city and local area
- Relationship and activity with parents



International Teachers Exchange Programme

School Visit

Observe classes and facilities

Interests

- The Number of students per class
- Tuition fee
- Teaching materials
- Textbook



International Teachers Exchange Programme

School Visit

Exchange opinions, experiences, teaching skills, curriculums and etc...



- Career education
- Evaluation
- Bully
- Study aboard
- Process to become a teacher
- Teachers' training
- ESD(Education for Sustainable - Development)
- Environment education
- Foreign students
- Smart phone problem



International Teachers Exchange Programme

School Visit

School lunch with students




CHINA

JAPAN

KOREA







International Teachers Exchange Programme

School Visit


Cultural Class








Teachers experience teaching in other county



Children learn cultural diversity



International Teachers Exchange Programme

Cultural Experience



International Teachers Exchange Programme

Interactive workshop




Find the school to exchange activities among students

Learn diverse knowledges on education

Share their problem and find the way to overcome

International Teachers Exchange Programme

I want my students and colleagues to know what I felt in Japan. I will promote mutual understanding and keep in touch with Japanese teachers. (Chinese Teacher)

Friendship

Before the programme, I did not really know what ESD is. However, I started to consider about ESD during the programme and also became more active in the school. (Japanese Teacher)

Become more active

My point of view is changed by the programme. I am used to be interested in only around myself, however after I joined the programme, I realize what I teach influences children who will change the future. (Japanese Teacher)

Transformation

International Teachers Exchange Programme

Outcome

Discussion "Food loss" Japanese - Indian Students

MOU Students visit school each other Japan - Thailand

Letter Exchange Japan - Korea

Skype

International Teachers Exchange Programme

Challenges...

- Programme is needed to deepen the theme
 - *We try to introduce every type of schools in Japan.
- Number of participants
 - *Budget is limited.
- What participants would like to learn is different in each country
 - *We need research and discuss the educational trends in each country.
- Schedule
 - *Is number of school and cultural place participants visit too many or too few? Is the duration of the programme too short?

And etc...

Let's discuss our challenges later!

International Teachers Exchange Programme

Thank you for Listening.

International Educational Exchange Department

Please follow our Facebook Page!



Ministry of Education, Culture and Sports
Government of Korea

1st Expert Meeting and Conference on the International Teachers' Exchange Programme
「Unpacking the Korea-Japan Teachers' Dialogue Programme」

22-23 February, 2019, Japan
Hyunsook SEO
Director of the Division of Education
KNCU

Korea-Japan Teachers' Dialogue Programme

For sustainable partnerships

Since 2001

19 years of collaboration to promote mutual understanding and friendship



国際初等中等教育教員招へい
son Programme for Korean Teachers (I
に加教育の要員公等師範
韓日本スコ・ア



Korea-Japan Teachers' Dialogue Programme



Japanese and Korean teachers have a conversation at a welcome reception (2019)



Korean teachers meet Japanese students in Seimeigaoka Elementary School (2019)



Korea-Japan Teachers' Dialogue Programme



Korean teachers observe a class at Ozo Junior High School (2019)



A Korean teacher shows Japanese students how to play a traditional Korean game at Seimeigaoka Elementary School (2019)



Overview

What is the Korea-Japan Teachers' Dialogue Programme?

WHEN?

- 1) Japanese teachers' visit: July
- 2) Korean teachers' visit: January

WHO?

- 1) Japanese participants: 50
- 2) Korean participants: 100 from primary and secondary schools

HOW?


- 1) Visiting schools and Boards of Education
- 2) Home visits
- 3) ESD workshop
- 4) Cultural experiences

FOR WHAT?

EIU → EIU, GCED, ESD

4 Quality Education

A good tool to implement SDG4 Education 2030



Overview

What are the key features?

Strong sustainability


Large-scale participation

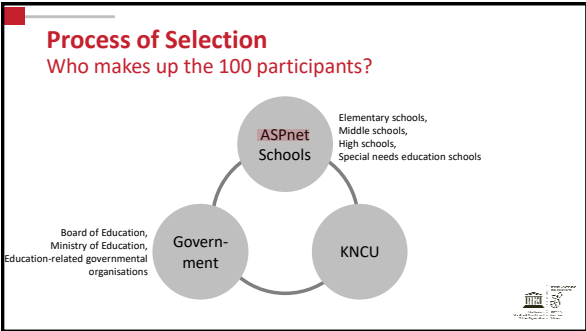
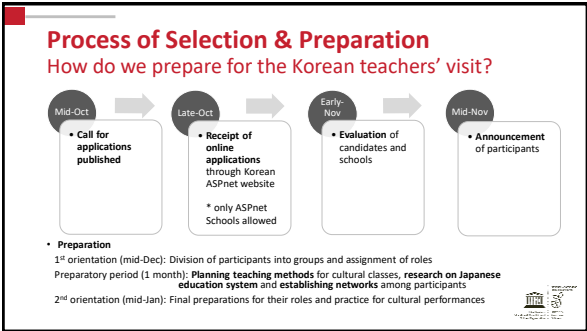
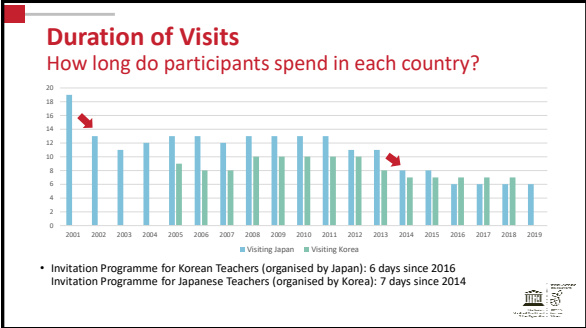
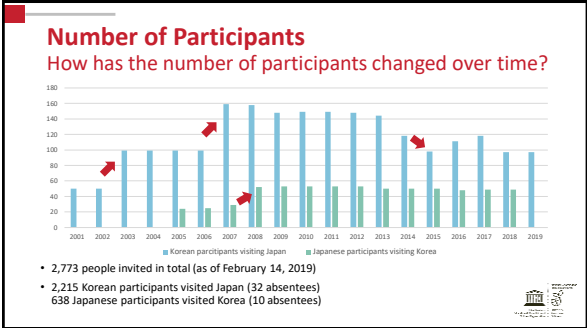
International educational exchange, building understanding through personal experience

A variety of events from educational to cultural aspects

4 Quality Education

A good tool to implement SDG4 Education 2030





Assessment Criteria

What is considered in selecting teachers?

School participation in ASPnet programmes organised by KNCU (50%)	School participation in ASPnet Local Committee activities (30%)	Application (20%)	Other criteria
<ul style="list-style-type: none">Participation in the National Assembly of ASPnet SchoolsSubmission of annual reportsParticipation in Rainbow Global Citizen ProjectParticipation in other workshops and programmes	<ul style="list-style-type: none">ASPnet Local Committees' representative schoolsParticipation in Local Committees' activities (as assessed by ASPnet Local Committees)	<ul style="list-style-type: none">Demonstration of past relevant experience and future plans for ASPnet activitiesLanguage skills	<ul style="list-style-type: none">Invitation of Japanese participants to their schoolPrevious participation in the programme (Prioritising schools which have never participated)

Characteristics of Assessment

What is unique?

Features	Implications
<ul style="list-style-type: none">Only allowing ASPnet School teachers to apply for the programme	<ul style="list-style-type: none">Motivating teachers to engage in ASPnet activities
<ul style="list-style-type: none">High competition among candidates caused by the increased number of ASPnet Schools in Korea	<ul style="list-style-type: none">Encouraging ASPnet Schools to ensure quality education and create a globally-focused environment

Characteristics of the Korean candidates

What is unique?

Features	Implications
<ul style="list-style-type: none">Creation of a selection criterion about collaboration with ASPnet Local Committees, to evaluate schools' participation in the Local Committees' activities (Increased involvement)	<ul style="list-style-type: none">Building Local Committees' capacities to monitor and evaluate ASPnet Schools' activitiesPromoting Local Committee-led governanceStrengthening the partnership between Local Committees and ASPnet Schools

ASPnet in South Korea at a Glance

How is ASPnet operated in Korea?

- ASPnet in South Korea started with four middle and high schools in 1961 and the national network now has **611 schools**.
- A total of 611 schools are active members as of February 2019 (183 elementary schools, 122 middle schools, 291 high schools, 6 universities, 9 special schools)
- Local Committees operate in collaboration with 17 Boards of Education.

Percentages of each type of school in Korea's ASPnet (2019)

School Type	Percentage
Elementary school	48%
Middle school	25%
High school	18%
University	7%
Special school	1%

Relevance

SDG 4 – Education 2030 (target 4.7)

An effective tool to foster UNESCO's educational values such as ESD, GCED and EIU for a sustainable society

SDG 4 (target 4.7)

"By 2030, ensure that all learners acquire the knowledge and skills needed to promote sustainable development, including, among others, through **education for sustainable development** and sustainable lifestyles, human rights, gender equality, promotion of a culture of peace and non-violence, **global citizenship** and appreciation of **cultural diversity** and of culture's contribution to **sustainable development**."

Outcomes

What are the programme's benefits?

- Developing teaching methods:** exchange of teaching expertise and methods resulting in the introduction of new approaches to education in each country
- Strong and multifaceted partnerships:** establishment of sisterhood ties among Korean and Japanese schools and networks among teachers
- Increased participation in ASPnet activities:** growth of interest in ASPnet and building of a network between domestic participants

Example: Developing Teaching Methods

Teachers' discussion on sports education and after-school clubs

"While visiting some Japanese schools, I was impressed by Japanese Sports Education, that is different from Korea. In Japan, it seems that professional athletes come from after-school sports clubs, while Korean education is still indulging in elite-focused sports education. We'd better **apply the Japanese approach** to the Korean physical education system."

from a Korean participant's report (Group C, 2019)

Example: Strong and Multifaceted Partnerships

Sisterhood ties

Year	Schools	Activities
2007	Busan International High School - Nara Women's University Secondary School	Sisterhood tie
2010	Guksan Elementary School - Ueno Elementary School	Sisterhood tie
	Miryang Girls' High School - Meijo Gakuin High School	Sisterhood tie
2011	Chungnam High School - Chiba Prefectural Ichikawa Subaru High School	Sisterhood tie
2012	Seoul Shinyongsan Elementary School - Nagatadai Elementary School	Teachers/students exchange
2014	Geumjang Elementary School - Nara-City Seibi Elementary School	Teachers/students exchange
2017	Haegang High School - Kitasuma High School	Sisterhood tie

Challenges

What do we need to overcome?

- **Numerous senior/manager-level candidates:** a relatively large number of applications come from principals or vice principals rather than teachers
- **A lack of a long-term roadmap:** the programme is changed and enhanced annually, e.g by introducing new projects; however, need to have a long-term umbrella roadmap to implement ESD, GCED, EIU etc.
- **Demands for developing and diversifying content:** need to increase the quality of the programme by designing creative and distinctive events
- **Hard to maintain partnerships:** geographical and linguistic limitations between participants
- **Staff capacity building:** need to train coordinators who design the programme



Suggestions

How do we overcome the challenges?

- **Setting a quota on teachers**
- **Devising a long-term plan:** collaborate with international organisations, academics, and teachers to outline an umbrella roadmap
- **Introducing a system for evaluation and programme development:** regularly hold a forum or a round table discussion with education professionals and participants
- **Creating a website:** build a web-based network to communicate effectively and collect data to increase accessibility
- **Establishing an advisory council:** monitor the planning and operation of the programme through an advisory council



Example: Evaluation and programme development Korea-Japan Teachers' Forum on ESD (2010~2011)

- **Participants:** 53 Japanese educators / 50 Korean educators / education researchers
- **Theme:** 'Risk education and ESD' and 'local community-based ESD'
- **Programme**
 - 1) Discussion and presentation on the ESD-related education system in each country
 - 2) A group round-table for various issues
 - 3) A professor's lecture on the subject of risk education
- **Results**
 - 1) Built capacities of teachers who implement ESD
 - 2) Strengthened networks between education professionals
 - 3) Published a report on this ESD Forum
 - 4) Submitted a paper on risk education to an academic journal



Impact

What impact does the programme have?

- **Sustainable and supportive partnerships:** building friendships among schools, teachers and students in two countries
- **Deepening mutual understanding:** gaining of first-hand experiences of Japanese/Korean culture and broadening participants' existing knowledge on each country and people
- **Disseminating international experiences and universal values:** transmission to students of teachers' observations and findings on topics such as peace, human rights, intercultural learning, and sustainable development



Example: Sustainable and Supportive Partnerships Korean ASPnet Schools' voluntary aid activities for the 2011 Great East Japan Earthquake

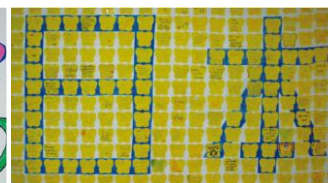
Mainly led by teachers who took part in the Japan-Korea Teachers' Dialogue Programme



\$31,455 RAISED BY
STUDENTS IN 2011



30 KOREAN TEACHERS
VISITED KESENNUMA IN 2012




Messages from Jeonbuk Foreign Language High School's students (2011)

A poster painted by students in Pohang Jecheon-Seo Elementary School (2011)



Example: Deepening Mutual Understanding


Sharing cultural practices



A Japanese teacher performs a Matsuri local dance with Korean students. (2018)



A Korean teacher teaches the traditional Korean game "Yutnori" to Japanese students. (2015)



International Teachers' Exchange Programme

How can we make a bigger impact?




A stepping stone to spread UNESCO's principles through people-to-people communication with other countries






United Nations
Education, Science and
Culture Organization



Regional Cooperation
Bureau of Korea

ありがとうございます 감사합니다.



facebook.com/unescokor



blog.unesco.or.kr



unesco.or.kr



youtube.com/unescokor



유네스코한국위원회
UNESCO KOREA COMMISSION

Thailand Country Report on International Exchange Programme



By : Ms. Supranee Khamyuang
Chief of Bilateral Cooperation Unit
Bureau of International Cooperation
Ministry of Education, Thailand

Outline



1. Exchange Programme for Thai Teachers



2. Exchange Programme for Japanese Teachers

1. Exchange Programme for Thai Teachers



Background



Teachers' Selection Process/Criteria



Outcomes/Challenges

Exchange Programme for Thai Teachers

-Background-

- MOE, Thailand worked with MEXT/Japanese EMB/ACCU since 2015.
- Each year, 15 primary and secondary teachers from public & private schools were invited to Japan (2015-2018 = 60 teachers).
- Duration : 1 week
- Main objectives:
 - Share & learn Japanese educational system
 - Exchange teaching experiences
 - Promote mutual understanding & friendship
 - Promote ESD/SDGs

Exchange Programme for Thai Teachers

-Selection Process-

1. Announce to Thai schools

2. Set up the Selection Committee

3. Announce the selection results

4. Orientation/Participation in Japan

5. Submit the report to the MOE, Thailand

Exchange Programme for Thai Teachers

-Selection Criteria-

1. Thai Teachers who have never been to Japan
2. Teachers across all regions of Thailand
3. Teachers from various fields; ESD/SDGs; Special Education; Disaster etc.
4. Have strong will to build and reinforce the network among teachers between two countries
5. Promote international understanding to students/schools in Thailand



Exchange Programme for Thai Teachers

-Orientation-



Exchange Programme for Thai Teachers

-School visits in Japan-



Exchange Programme for Thai Teachers

-School visits in Japan-



Exchange Programme for Thai Teachers

- Discussion with Japanese Teachers -



Exchange Programme for Thai Teachers

- Expansion of the activities -



Ban Khokmao School (2018)



Exchange Programme for Thai Teachers

- Expansion of the activities -



The Northern School for the Blind (2018)



Exchange Programme for Thai Teachers

- Expansion of the activities -



Preeyachot School (2018)



Exchange Programme for Thai Teachers

- Expansion of the activities -



Watladdkhao
School/Jirapittaya School
(2018)



Exchange Programme for Thai Teachers

- Expansion of the activities



Nonghinwittayakom School (2016)



Exchange Programme for Thai Teachers

-Outcomes-

- ◆ Depart from Japan with impressive experiences;
 - Better understanding about Japanese education system, culture and society
 - Gain more experiences in teaching and learning from visiting Japanese schools
- ◆ Promote experiences gained to Thai students and teachers
- ◆ Extend the cooperation between Thailand and Japan by matching Thai schools with Japanese schools (partner schools)
 - Bankadwittayakom School + Kanto International Senior High School (2016)
 - Takleprachasan School + Keisen Jogakuen Junior High School (2016)

Exchange Programme for Thai Teachers

-Challenges-

- ◆ It is difficult to select 15 participants from teachers throughout the country. A large number of Thai teachers are interested in the programme.)
- ◆ The schedule for Thai teachers, during their stay in Japan, was very tight.
- ◆ More cultural activities/visits should be provided, if possible.

2. Exchange Programme for Japanese Teachers

-Background-

- Thailand started hosting the programme in 2018
- Invite 5 teachers from lower and upper secondary schools/educational administrators + 1 MEXT + 1 ACCU to join the programme in Thailand, between 26 August and 1 September 2018
- Main objectives:
 - Provide opportunities for participants to exchange their teaching experiences
 - Promote mutual understanding & friendship
 - Strengthen the cooperation between Thai & Japanese teachers

Exchange Programme for Japanese Teachers

-Process of Designing the Programme-

1. Draft the schedule & activities to cover the main objectives
2. Submit the project to be approved by the MOE
3. Contact the participating schools & historical and cultural landmarks
4. Send an invitation letter to the MEXT
5. Organize the programme according to the schedule (courtesy calls to executives of the MOE, Thailand/school visits/landmark visits)
6. Evaluate the project

Exchange Programme for Japanese Teachers



- Courtesy call on Deputy Permanent Secretary for Ed.
- Orientation



Exchange Programme for Japanese Teachers



Welcome Dinner



Exchange Programme for Japanese Teachers



School visit:
Takleeprachasan School



Exchange Programme for Japanese Teachers



School visit:
Takleeprachasan School



Exchange Programme for Japanese Teachers



School visit:
Jirasartwittaya School



Exchange Programme for Japanese Teachers



Thai Historical Site Visits



Exchange Programme for Japanese Teachers

-Outcomes-

- Japanese teachers departed with impressive experiences gained from joining the programme in Thailand
- Suggest to continue the next year programme (2019)
- Recommend to increase the number of participants (at least 10 teachers)



Exchange Programme for Japanese Teachers

-Challenges-

- ❖ It's difficult to increase the number of Japanese teachers due to **budget constraint**.
- ❖ The key topics of discussion between Thai and Japanese teachers should be narrowed down.



Thank you



INTERNATIONAL TEACHERS EXCHANGE PROGRAMME



COUNTRY REPORT - INDIA
1st Expert Meeting : 22-23 February 2019

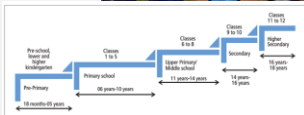
PROGRAMME OVERVIEW

- Centre for Environment Education (CEE), as a Centre of Excellence supported by the MoEFCC, Government of India. It engages in **promoting environmental awareness nationwide** and is committed in the promotion of **sustainable development**.
- ACCU and CEE entered an MoU to engage in International Teachers Exchange Programme. Over last three years, CEE is as a **facilitator to Ministry of Human Resource Development, Govt. of India** is coordinating this programme



INDIAN SCHOOL SYSTEM

- The Ministry of Human Resource Development (MHRD) spearheads the Indian school system.
- Two departments:** A) Department of School Education & Literacy B) Department of Higher Education
- Department of School Education & Literacy** is responsible for development of school education and literacy in the country



SCHOOLS IN INDIA

- School Types**
 - Government educational institutions
 - Local body institutions
 - Private-aided institutions
 - Private unaided institutions
- No. of Schools : 15,22,346**
- No. of Teachers : 86,91,922**
- No. of Students : 56.6 million students**
 - 50.7 million in public schools
 - 05.9 million in private schools



SCHOOLING IN INDIA - CHANGING

- Greater focus by GOI** in school education
- Improvement in School Infrastructure, free food etc
- Emphasis among parents** to provide good schooling to their children
- Variety of **school curriculum** – International, National, Regional and is changing
- Competition among schools** to provide better education
- Sending kids to an **elite school is a matter of pride** among urban parents
- Mushrooming** of Private Schools and have become a **commercial entity**
- Teachers are under **pressure** in imparting quality education



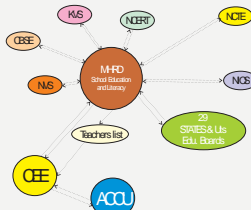
TEACHERS EXCHANGE PROGRAM – A NEED

- Improve the quality of education** by providing opportunities for exchanging teaching experiences between teachers of both the countries
- Know and imbibe the **Japanese educational system** and good practices by the participants
- Contribute to **build and reinforce a network among teachers** in both the countries' through the school visits and institution visits by teachers and through educational exchanges
- Promote **understanding of Japanese culture and society**; mutual understanding and friendship.
- Create a platform** for sharing and learnings among teachers and promote ESD



TEACHER SELECTION FOR EXCHANGE PROGRAM

- **UPHEAL TASK** due to number of teachers and type of schools spread across large country



ACCU - TEACHER EXCHANGE PROGRAMME

- **Well thought and well planned**
- **Meticulously organized**
- **Provide greater exposure**
 - Interaction with **MEXT officials**
 - Visit to different **types of schools**
 - **Interaction** with school authorities, teachers and students
 - **Field visit** to understand the local culture, tradition and nature
 - Interaction with **Indian Embassy**

This initiative by ACCU has resulted in a long lasting benefits to Indian Teachers who are practicing the learning's gained from Japanese schooling in their schools.



RELEVANCE

- **Less or no understanding** about Japanese school systems among school teachers and school authorities in India
- No **such opportunities** for Govt Schools
- Such a programme provide **greater exposure or insights** to incorporate the good practices into our educational policies
- Teachers can **make greater impacts among school children** promoting ESD
- Build **long lasting relationship** between teachers of both the countries
- Know only Japanese cars in India. **Need to know** their **School Education**



RELEVANCE

- **Dr. Ashminder Singh Bahal** - "Visit to MEXT illuminated and provided an insight into the education policies of Japan and helped in drawing the comparison between Indian and Japanese education policies. Visit to schools clarified several issues".
- **Mr. G S Basavaraju** - "Provided greater opportunity to have one to one peer learning and exchange from teachers and understand the examination system of Japan, pedagogies and good ESD practices. Explored the challenges and common issues of education system in both nations".
- **Ms Urvashi Soni** - "Teachers in any country are the flag holders of any education system no matter how good or bad the infrastructure is. Japanese teachers devotion is the one factor that I liked most and found them free to invest their full time towards teaching and trying innovation in teaching."
- **Mr. Santosh Bahuguna** - "Students dedication toward their work; Students freedom to opt subjects of their interest at intermediate and continuous support students at every stage by the state government make education system in Japan more robust, strong and meaningful".

RELEVANCE

- **Ms Tarun Punia** - "Japanese schools impart education that takes a holistic approach integrating intellectual value and physical education. Skill integrated education starting from school curriculum in Japan is inventive and good concept. These two things are very much essential for Indian School scenario"
- **Dr. Rajendra Kumar Nayak** - "Promotion of ESD through ASPnet School in Japan is an unique idea which is practiced from school level really impressed me. Priority of vocational and skill development starting from school curriculum in Japan was a big take away from this programme."
- **Dr. Anil Kumar Singh** - "It was an incredible learning experience to me. I understood and learnt on how the overall quality education is imparted in Japan's Elementary and Secondary Education system. The measures taken by Japan Govt to Enhance Career Education and Vocational Education that Primarily Target Young People in Japan is one thing that India needs to adopt."
- **Dr. Ishwant Kaur** - "School visits helped to know about Japanese education system. Felt great pleasure by the warm welcome by students and school staff. The schools with well equipped labs, sports facilities and spacious classrooms and the concept of learning by doing inspired me a lot."

IMPACTS / OUTCOMES

- **Outreach**
 - Over 220 school management officials are oriented
 - Over 1200 teachers and 3500 students have been oriented by the participated teachers and officials about the learning's from the programme
- **Media Coverage**
 - Over 8 local media covered the programme importance
- **Implementation in schools**
 - Participated teachers are imbibing the Japanese mode of teaching in their classroom sessions being friendly, more interactive, hands on activities, punctual, focus on ESD etc.,
- **Increased curiosity** among School Children about Japanese schools
- **Strong network** built of participated teachers across the country
 - Peer sharing and learning's and exchange of thought and materials; use of social media
- **Greater recognition and respect** owed to the participated teachers



IMPACTS / OUTCOMES

• Impact on Mindsets among Teachers

- Teachers are inspired about the **Punctuality and discipline**, Maintaining better relationship with the children and giving them more freedom; Activity oriented teaching-learning; Steps taken up promoting Education for sustainable development
- Realization that teaching can be a passion** rather than only duty provided if teachers are given liberty and time to teach.
- Introduced to **another world of education** where everything including syllabus, infrastructure, methodology is almost perfect and motivated to bring about change in teaching methodology,
- Motivated to **have moral education** at elementary level.
- Has brought change in the **learning perception through co-operative** among the peers and teachers
- Education for sustainable development through networking with schools** and open-distance learning system is one of the best practices in Japan that addressed a reasonable and equitably distributed level of economic and social wellbeing that can be perpetuated continually for many human generations.

CHALLENGES

- Vast country with **various languages with local issues and concerns**
- Different types of schools** - private, government and semi government
- Issue of **sustainable development**
- Executing of the **learnings gained** from the programme through our education systems
- Advocacy and influencing policy makers on inclusion** of best practices from Japan's into Indian education System
- Lot of **administrative works** for teachers apart from teaching
- Maintaining continuity** of the exchange programme
- Sustaining the network** of participated teachers

OPPORUNITIES

- Exclusive exchange programme for decision makers** – from each state of India
- Rewarding and recognition** for teachers who bring about changes in the school systems from the exchange programme
- Creation of platform for learning and sharing among school between two countries**
- Inviting **Japanese teachers to India**
- Exchange **between school children between two countries** through distance mode

KEY TAKE AWAYS

- Enhanced understanding** about the Japanese Educational System, its policies and National Curriculum Standards
- Better understanding about **Indian educational system of among Japanese Teachers**
- ACCU's efforts in promoting ESD** through international exchange programmes
- Greater **emphasis on integrated education**; Vocational Skill Education from Class IX
- Teachers **obtaining license for 10 years**
- Stress free learning** environment in the Classrooms.
- Punctuality, commitment, dedication**, meticulous planning and implementation towards imparting quality education in school
- Special attention for special need students**
- Need for **exclusive Super Science Schools** in every district of our country



PHOTO GLIMPSES OF EXCHANGE PROGRAMME

"I observed that
Learning place where
teacher changes,
children change and
the future change"
Ms Tarun Punia,
Participated Teacher



THANK YOU
SANTOSH R SUTAR

santosh.sutar@ceeindia.org
santoshsutar75@gmail.com

**Education for Sustainable Development
in China:
20 Years ESD Progress and Experience in
Educator Training**
(Remarks on the 1st Expert Meeting and 2018-2019
Conference on International Teachers Exchange Programme)

Shi Gendong
Chinese National Working Committee for UNESCO on ESD
2019.2.22 Tokyo



Keypoints

1. Education for Sustainable Development: The Important Chapter in Chinese Education History in Recent 20 Years.
2. Educator Training in ESD: Five Pillars and Functions.
3. Proposal on ESD for SDGs.
Suggestions on Sino-Japan cooperation and exchanges on ESD.



I. Education for Sustainable Development: The Important Chapter in Chinese Education History in Recent 20 Years



1.1 Studying the Chinese government and UN-UNESCO documents so as to promote spreading ESD in China in the form of research, lectures, training, translation, editing and publication and etc.
以研究、讲座、培训、翻译、编辑出版等形式研究中国政府和UNESCO文件，促进生态文明与可持续发展教育在中国的广泛传播。



1.2 Carrying out localized research on ESD and publish educational papers and monographs on ESD (the total number of words are more than 5 million).

组建全国可持续发展教育研究指导机构，开展本土化专题研究，发表生态文明与可持续发展教育论文与专著总字数达500万字以上。



1.3 Actively suggest the government to promote ESD into the national public education policy and education planning.

积极向政府建言并推动可持续发展教育进入国家公共教育政策与教育规划。



1.4 Performing research on curriculum, teaching & learning innovation has promoted school development and teacher professional growth, and has fostered a number of ESD experimental schools & districts and outstanding individuals .

开展课程、教学与学习创新研究促进了学校发展与教师专业成长，并培育了一批可持续发展教育促进优质教育的实验学校、实验区和优秀个人。



1.5 Launching National ESD and learning for sustainable development on teenagers for scientific and technological innovation practice results by collection, selection and commendation activities, emerged thousands of outstanding innovative practice results.

开展全国性青少年可持续发展教育与可持续发展学习科技創新实践成果培养、征集、评选与表彰活动，推出了上千项优秀创新实践成果



1.6 Formulating a national-local-school three-level ESD training systems and effective ways for principals & teachers.

建立了全国-地方-学校三级校长、教师可持续发展培训制度与有效方式。



1.7 Establishing a cooperation ESD alliance among stakeholders, such as social organizations, museums, enterprises.

部分社会团体、博物馆、企业等利益相关者建立了可持续发展教育合作联盟。



1.8 Constructing a platform for information collecting, storing, exchanging and serving in the forms of magazines, websites and WeChat.

建立了会杂志、网站、微信等方式在内的可持续发展教育信息收集、储存、交流与服务平台。



1.9 Building a high-quality team of experts on ESD for research, organization and guidance.

建立与汇聚了一支高质量的可持续发展教育研究、组织与指导专家队伍。



1.10 A stable international expert network and exchange platform on ESD have been built

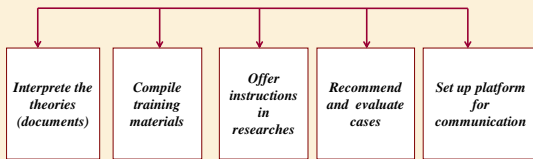
搭建了稳定的可持续发展教育国际专家网络与交流合作平台。



2. The Educator Training in ESD: Five Pillars and Functions



Five Pillars



14/3/2019

2.1 Interpret the theories (documents)

The implementation of UN Decade of ESD proves UNESCO's prominent role as a **Laboratory of ideas**.

The following five documents clarify the general framework of ESD.



It is necessary to deepen our understanding of ESD and localize the theory to principals and teachers.



14/3/2019

2.2 Compile training materials

Functions of ESD training materials

- Bridging the gap between ESD theory and practice



- A self-help tool for ESD educators, trainers and doers



14/3/2019

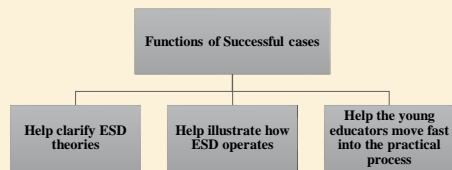
2.3 Offer instructions in researches

Researches are indispensable. Trainings and conducting researches are interrelated. Only the combination of them will make sense.



14/3/2019

2.4 Recommend and Evaluate cases



14/3/2019

2.5 Set up platform for communication

Hold symposiums during national training

Encourage mutual visits among ESD experimental districts and schools , experience sharing sessions , open classes

ESD on-line communication



14/3/2019

3. Proposals on ESD for SDGs



14/3/2019

Suggestions on Sino-Japan cooperation and exchanges on ESD

Suggestions on Sino-Japan cooperation and exchanges on ESD

Establish China-Japan Annual Dialogue System on ESD

Cooperate in special research on ESD curriculum construction and sustainable schools

Both of us arrange 20 principals and teachers of ESD schools to conduct exchange visit annually

Both of us arrange 50 ESD schools students to conduct exchange visit annually

Jointly launch principals and teachers of ESD schools special training

Thank you

(2)初等中等教職員国際交流事業報告会
&ワークショップ°

「多様性をちからに～教育実践者による国際理解とは」
2018-2019 Conference on International Teachers Exchange Programme

開会挨拶：ACCU 国際教育交流部 部長 進藤由美 Welcome Remarks by Ms. Yumi Shindo, ACCU

まず初めに、ACCU 国際教育交流部部長の進藤が開会挨拶を述べた。進藤は報告会 & ワークショップに参加された日本人教職員の方々に向けて、今日集まっていた方は既に ACCU 事業に何らかの形で関わりのある ACCU ファミリーであり、今日は和気あいあいとした時間を過ごし、より良い国際交流を目指した 1 日にしたいと思っている旨が話された。そしてまた、教育現場に戻った際にはそれぞれのネットワークをもちいて国際交流・国際理解を深めていくて欲しいということが述べられた。

また、今回の会について、現在行っている日本と韓国・中国・タイ・インドとの間の事業は 2 国間の事業だが、今回はその 5 カ国のエキスパートが集まる初めての機会であることに触れ、交流事業をより良くそして深く発展させていくことがこの会の目的であることが述べられた。

First, Ms. Shindo, Director of the International Educational Exchange Dept, ACCU, presented the welcome remarks. Ms. Shindo told the Japanese teachers at the conference that they are the ACCU Family who have already engaged with ACCU programme in some way, and she wants everyone to enjoy the friendly atmosphere and aim to improve international exchanges. Additionally, she asked teachers to deepen international exchange and international understanding by using each network when they returned to school.

She also provided information about the expert meeting and conference as well as the current bilateral International Teachers Exchange Programme between Japan and South Korea, China, Thailand, and India; therefore, today is the first opportunity for all five countries to be together. Finally, she mentioned that the purpose of the event was to improve and deepen the development of the programme.

基調講演: 早稲田大学大学院 教授 黒田一雄氏

**Key Note Speech by Mr. Kazuo Kuroda, Professor,
Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University**

プログラムの始めに、早稲田大学大学院の黒田一雄教授により「持続可能な社会のための国際理解・平和構築における教員交流の役割」と題した基調講演を行っていた。講演では、世界・アジア地域・2国間の3つのコンテキストで教育交流を捉える形で説明がされた。

まず、世界的なコンテキストについては、グローバリゼーションが進展する中で教育についてもグローバルガバナンスが形成されており、国際レベルで考えなければならない事柄であることが述べられた。そして、UNESCO 憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という言葉を参照し、歴史的にも第二次世界大戦後の世界は教育を通して平和を目指して来たことを振り返り、「平和」は教育交流の最も根源的な価値であることに触れた。

また、現在の世界的潮流である SDGs を挙げ、ターゲット 4.7 として「持続可能な開発等のための教育、平和および非暴力的文化の推進、グローバルシチズンシップ、文化多様性」が挙げられていることを示した。また、実は当ターゲットは日本・韓国・中国の協働により SDGs に組み込まれたという舞台裏について語り、平和のための教育交流はアジア地域の国々が協力して進めている事柄であることが示された。

The conference started with a keynote speech by Professor Kazuo Kuroda entitled “The role of International Teachers Exchange Programme in international understanding and peace building for realizing the sustainable society.” He gave a lecture on educational exchange in three contexts: the world level, regional level, and country level.

First, for the world level context, he explained that as globalization advances, global governance has been shaped regarding education as well. Therefore, education should be discussed at the global level. Referring to the preamble of UNESCO’s constitution, he explained the history that the world after WW II has been aiming for peace the education, and peace is the most fundamental value of the educational exchange. He also mentioned SDGs as today’s global trend and pointed out that the target of 4.7 regards the promotion of ESD, a culture of peace, Global Citizenship, and cultural diversity. Additionally, he told us about the backstage history of the target of 4.7 and that it was actually incorporated into SDGs by the collective effort and cooperation of South Korea, Japan, and China.

Second, regarding educational exchange in the context of the regional level, he mentioned the Asian framework for cooperation such as the ASEAN+3/+6, APEC, TPP, East Asia Summit, and rapid increase in overseas students within the region. He also pointed out that there is already strong interdependence and interactions among people within the Asia region, and educational exchange would promote Asian citizen awareness and mutual understanding, which would contribute to regional integration and peace within the region.

次に、アジア地域のコンテキストでの教育交流については、ASEAN+3/+6、APEC、/TPP、東アジアサミット、アジア域内の留学生の急増などを挙げ、域内の相互依存と交流は事実上はかなり進んでいることを示し、域内の教育交流はアジア市民意識の形成と域内の相互理解の促進に寄与し、地域統合および域内の平和に貢献し得ることが述べられた。

そして、2 国間のコンテキストでの教育交流については、ACCU の教員交流事業の対象国である各国間の関係について触れ、教育交流の意義を示した。例えば、日韓・日中関係については、歴史認識・領土問題等により両国関係に不和が生じることがあり、それを乗り越えていくためにこそ教育および文化の交流を通じた相互理解と友好の促進が重要であることが述べられた。また、日泰・日印関係については、タイとインドは ASEAN と南アジアの中核国で勃興する経済大国であり、更に交流と友好を深めることは日本にとっても重要である点に触れた。

最後にこれまでの内容を踏まえて、学術的な視点から教員国際交流事業の平和に対する効果、それを裏付ける理論や仮説、プログラム形成・運営に関する助言、そして課題や今後の展望等について触れた。そして教員交流事業は、その効果が教員から多くの子どもへ波及し、ひいては国レベルでの相互理解と友好が促進されるという、平和の実現に向けた有効なアプローチであることを述べて基調講演を締めくくった。

Third, regarding educational exchange in the context of the country level, he argued for the significance of educational exchange and mentioned the international relation between each country. For example, the Japan–Korea and Japan–China relationships at the country level have some discords due to several political issues; therefore, educational and cultural exchange to promote mutual understanding and friendship at citizen level is critical. Regarding the Japan–Thailand and Japan–India relationships, he mentioned that both countries are emergent economic powers and core countries in ASEAN and South Asia and suggested the importance of further strengthening the exchange and friendship with those countries.

Finally, from an academic perspective, he discussed the impact of international teacher exchange programs on peace building, theories and hypotheses, advice on project design and challenges, and future prospects. He closed the lecture by emphasizing that international teachers exchange programmes, the impact of which spreads from teachers to students, eventually leads to mutual understanding and friendship at the country level and is an effective approach for realizing world peace.



基調講演をおこなう黒田教授

プログラム参加者、訪問校からの報告 Reports by participants of the past programmes

徳島県上板町立高志小学校 教諭 富樫未来氏

Ms. Miki Tomigashi, Takashi Primary School, Tokushima Prefecture, Teacher

2018 年の中国派遣プログラムに参加した富樫先生は、プログラムがご自身の気持ちや価値観にどのような変化をもたらし、現在の教育活動に繋がっていったのかについて次のように共有された。

勤務校の校長先生からの「視野を広げるために世界を見てきなさい」という言葉がきっかけで参加したプログラムは、当初は消極的な気持ちもあったものの、プログラムでの様々な人との出会いや異文化との交流を通して自身の価値観が少しずつ変化し、より大きく境界線があいまいなものに変化していったと語られた。また、今までの自身の教師としての在り方を振り返り、今後の子供たちの教育は世界を視野に入れる必要があるという意識が芽生えた。以前は仕事はやらなければいけないものだと思っていたが、教育は子どもたちの未来をつくっていくものであり、今まで以上の教育をしたいという思いが強くなったと説明した。

そして最後に、自身の学校で先生方や生徒と共にやっている、国際理解教育、責任ある消費・生産、地産地消、食育等に関する様々な ESD 活動の紹介があり、平和で持続可能な社会実現のための重要な担い手となっている様子が伺えた。



発表を行う富樫氏

One of the participants in the Invitation Programme to China in 2018, Ms. Tomigashi, shared with us how the programme changed her mindset and sense of values and led to her present educational activities, as follows.

She said that the reason she joined the programme was because the school principal ordered her by saying, “You should go to see the world to broaden your horizons.” She mentioned that at first she had some passive feelings about joining the programme; however, through the encounters with various people and interactions with diverse cultures, her sense of value gradually changed to a broader one with a more ambiguous border. She also said she looked back at the past regarding how she has been acting as a teacher, and she became aware that the future of education for children must include a global perspective. She continued to say that before joining the programme, she had understood her work as a duty, but now, she was willing to improve the experience of education for her students.

Finally, she introduced several good practices of ESD, for example, Education for International Understanding, responsible consumption and production, locally grown and locally consumed activities, and food education. She seems to have become an important promoter for realizing peace and a sustainable society in the region.

石巻市立鮎川小学校 教頭 畠山政明氏

Mr. Masaaki Hatakeyama, Ayukawa Primary School, Miyagi Prefecture, Vice-principal

2018 年のタイ教職員招へいプログラムで学校訪問を受け入れてくださった宮城県石巻市鮎川小学校の畠山先生から、学校訪問受入れの概要と成果・課題に関して、次のような発表があった。

まず学校の概要として、宮城県の牡鹿半島に位置している自然豊かな環境にある小規模校で、石巻市内で唯一のユネスコスクールとして地域の伝統芸能・文化継承に取り組んでいることが説明された。また、8 年前の東日本大震災の際には大きな被害を受けており、地域との繋がりを重視した防災教育・安全教育を行っていることが説明された。

タイ教職員招へいプログラムでの学校訪問では異文化交流を中心に、タイの民族衣装の紹介、タイ民族衣装の試着、地域の方も交えてタイ民族舞踊を踊るという交流が行われた。また、日本の児童からは、小学校の説明、鮎川の伝統芸能「七福神舞」や牡鹿黒潮銀鱗太鼓の披露がされ、大いに盛り上がったことが報告された。

交流をした先生や生徒からの感想として、「直接触れ合うことの効果を実感した」「教師自らが世界に目を向けて学ぶ必要があると思った」「外国への興味関心が増した」、「海外の子どもとも交流したい」といったことが挙げられた。また、異文化との触れ合いは自身の文化の良さを見つめなおすきっかけにもなり、児童たちの自信と誇りも増したということも語られた。

Mr. Hatakeyama, the vice principal of Ayukawa Primary School in Ishinomaki city in Miyagi Prefecture where Thai teachers have visited through the “Invitation Programme for Teachers from Thailand in 2018,” presented a report about the overview of the school visit, its outcomes, and future challenges, as follows.

Mr. Hatakeyama explained that his school is small and surrounded by rich nature. Additionally, as the only member of the UNESCO Associated Schools in Ishinomaki city, the school works on a succession of local traditional culture/performing arts. Notably, the school area was severely damaged by the Great East Japan earthquake in 2011, and now, the school implements disaster prevention education/safety education that focuses on the connection and cooperation with local communities.

During the school visit by Thai teachers in 2018, the school conducted cultural exchange activities, such as introducing and wearing Thai traditional costumes and dancing traditional Thai dances with students and local residents. Then, Japanese students introduced their schools and presented their local traditional performing arts and traditional drums in return.

He introduced some comments of the students and teachers who joined in the activities, such as “I did understand the effects of face-to-face interaction,” “Teachers themselves have to learn with a global perspective,” “Children’s interests on foreign countries have increased, and they are eager to interact with foreign students.” He added that interaction with different cultures made them reconsider the importance of their own culture and helped children to increase their levels of confidence and pride.

神奈川県立有馬高等学校 教諭 半澤ゆかり氏

Ms. Yukari Hanzawa, Arima High School, Kanagawa Prefecture, Teacher

半澤先生は 2017 年にインド教職員招へいプログラムの一環として行われた日印交流会に参加したことをきっかけに、国際交流に積極的に取り組まれている。その活動にあたっての苦労や喜びが共有された。

当時、同じディスカッショングループメンバーだった CEE スタッフより、インドの Nagaon Bengali Girl's High School を紹介され、具体的な交流を実現させようと、現在も奮闘されている。

所属している神奈川県立有馬高等学校は国際理解教育や英語教育に力を入れており、アメリカ、韓国、台湾の高校や、さらには外の学校と交流がほとんどない県内の British International School とも定期的に交流している。また rice project や food project、最近では plastic challenge に取り組んでおり、今年から開始された実用英語に取り入れている。

その一方で、時差や年間行事スケジュールの違い、予算、他の公務との兼ね合い等の外国の学校と交流することの難しさも語られた。また、深い学びにたどり着くための生徒の語学力の向上や授業法の確立は課題となっていることも語られた。

しかし、生徒たちの間では、交流を通して英語が通じた時の喜びを感じるなど、変化がみられつつあることも述べられた。また、教員人事においても、ユネスコスクール担当教員数が当初の 2 名から 5 名まで増えるなど後押しとなる変化もあった。2019 年度から有馬高校は神奈川県から SDGs に関する指定校となり、総合的な探求の時間において SDGs をテーマにした展開に係る研究を実施することになったとお話された。

Ms. Hanzawa has been actively working on international exchange in her school after she joined the Japan-India teachers exchange conference conducted by the Invitation Programme for Teachers from India in 2017. She is now attempting to realize an international exchange among students enrolled in her school and Nagaon Bengali Girls' High School, which was introduced by a member of the CEE staff she met at the conference.

Kanagawa Prefectural Arima High School, where she works, is providing education to promote international understanding and foreign language education. And the school has regular exchange programmes with schools in the United States, South Korea, and Taiwan and British International Schools. They also conduct the "Rice Project," the "Food Project," and recently the "Plastic Challenge Project" in the class as well.

She also shared some difficulties in conducting exchange programmes, such as differences in time and the school calendar, budgets concerns, and the development of teaching methods and language ability to achieve deep learning. Notably, she observed that the international exchange programme had a positive impact on students and that there was a positive change regarding an increase in the number of teachers in charge of ASPnet school activities: from 2 to 5 teachers. She also shared that in 2019, the prefecture designated her school as an SDG school, and now, the school is conducting research on the development of the integrated learning period by focusing on SDGs.

東京都立石神井特別支援学校 主任教諭 町田直美氏

Ms. Naomi Machida, Shakuji School for Special Needs Education, Tokyo, Senior Teacher

2015 年韓国派遣プログラム参加してからの3年間の取り組みについてご報告いただいた。普通学級で学習内容を理解できにくい学習障害の児童のつらい気持ちを共有したい思いで、文字として認識できなかった韓国語を学び始め、その実体験が指導に役立つのではないかと考えたことが、韓国との交流の始まりであった。実際、学習障害児が感じているだろう学びにくさを痛感することができた。2015 年のプログラム中には、現地の特別支援学校への訪問は叶わなかったが、毎年、長期休暇を利用し韓国を訪ね、ついには3年越しに、特別支援学校の教員とも交流が生まれ、2018 年には学校訪問を実現させるまでに至った。

韓国訪問時には、知り合いの韓国教員が働く学校で、「出前授業」を実施している。特別支援教育に必要なノウハウを中心に授業を展開し、モデル提示の際の「このように〜」、「ここを見て」、「どうですか?」、「うまくできたね」の限られた4つの言葉だけでも韓国語で自分の言葉として伝えることで、交流を成立させている。一方、来日した韓国教員に七夕飾り作りなどを体験してもらい、これを韓国に持ち帰って授業に用いて頂く「土産授業」もあわせておこなっている。

現在は10名の韓国の教員と、SNSを活用し交流を続けているが、その原動力となっているのが子供たちの生の声である。その声を聞くために、次年度は、「出前授業」に加えて、教材を媒介にした交流も展開していきたいと希望を語った。何事も始めなければ始まらない。これからも一歩ずつ進めていく予定であると締めくくった。

Ms. Machida presented her activities from the past three years, after participating in the invitation programme in South Korea in 2015. In the beginning, she started to learn the Korean language in order to experience and understand the difficulties that children with learning disabilities feel in class. And it worked. This experience was the start of the exchange with the South Korean teachers for her. Since then, she has been communicating with the South Korean teachers she met in the exchange programme and has visited their schools every year during holidays. Although she could not visit a school for special needs education in South Korea during the programme in 2015, she finally contacted them and visited the school in 2018.

Every time she visits South Korea, she conducts a Demae-Jugyo (On-site Class) in school and offers Miyage-Jugyo (Souvenir Class). She found that using only four sentences in Korean, namely, “(showing example) like this,” “look at this,” “how is it?” and “good job” enabled them to communicate with each other, and those sentences are common in special needs education worldwide. Also, she offered a Miyage-Jugyo (Souvenir class) to the South Korean teachers who visited Japan. She introduces Japanese culture to them so that they can present the information to their students after returning to South Korea. She has presented, for example, information on decorations for the star festival.

At present, she has extended her network to ten South Korean teachers and has kept in touch using SNS. She said that children’s voices motivate her. In conclusion, she mentioned her plan to conduct Demae-Jugyo and to exchange activities using learning materials with South Korean teachers in the next fiscal year. All those experiences have had a profound influence on her educational value.

講演: Utak Chung 氏, APCEIU 事務局長 Lecture by Dr. Utak Chung, Director, APCEIU

冒頭に、ご自身と日本との関わりを振り返り、ACCU と長年に渡って友好関係を築かれていることを紹介された。講演は、APCEIU の行う地球市民教育 (GCED) の取組みと教職員交流事業の現状についての 2 本立てであった。

GCED については、(1)教員の能力開発、(2)研究開発、(3)資材開発と普及促進、(4)ネットワークとパートナーシップの 4 点が話された。教員研修としてのワークショップと教育プログラムは、毎年開催しており、毎年 67 名の教員を招き、全国的に GCED を推進できるように教員養成を行っている。2019 年はソウルにてグローバルワークショップを実施する予定である。

また、アジア各国でのさらなる展開のため、主に発展途上国向けに 3 か年計画で GCED 推進プログラムを実施しており、これは、カンボジアでは国家的プログラムにまで展開している。韓国内では GCED とは何かを伝えるため、地球市民キャンパスを APCEIU 内に設けており、2016 年以降 10,000 名を超える来場者を迎えている。

教職員国際交流については、現在モンゴル・ベトナム・タイ・カンボジア・マレーシア・インドネシア・フィリピンの 7 か国と実施している。プログラム前後で、相互交流や GCED への取組意欲に大きな変化をもたらしていることが語られた。

最後に、来年はオリンピックイヤーであり、「平和の祭典」であるオリンピックは GCED を推進する絶好の機会であるので、ACCU と協力して交流事業の拡大を図っていききたいと述べた。

Mr. Utak started his lecture by mentioning the friendship between him and Japan, and the ACCU, which he has built. He discussed lecture GCED and the Exchange Programme for Teachers as activities of the APCEIU.

As for GCED, he talked about four topics: (1) Capacity Building of Educators (2) Research and Policy Development (3) Material Development and its dissemination, and (4) Networking and Partnerships. The APCEIU has held an annual teacher training workshop programme. Every year, 67 teachers are invited to promote GCED at the national scale. In particular, the Global Workshop will be held in Seoul in 2019. Moreover, the 3-year long programme is conducted to promote GCED mainly in developing countries. In Cambodia, it has developed into a national project. The APCEIU also has open space where visitors can learn about GCED, called “Global Citizen Campus,” inside of their office building and more than 10,000 people have visited since 2016.

Regarding international teachers exchange programmes, the APCEIU has conducted a programme of this type with seven countries in Southeast Asia: Mongolia, Vietnam, Thailand, Cambodia, Malaysia, Indonesia, and the Philippines. The program greatly contributes to participants’ motivation to promote mutual understanding and GCED.

Finally, Mr. Utak emphasized that the Olympic games in Tokyo next year are a good opportunity to promote GCED because the event is called a “celebration of peace.” He concluded that the APCEIU will make an effort to enhance international teachers exchange programmes cooperating with the ACCU.

ワークショップ：玉川大学教育学部 教授 小林 亮氏

Workshop facilitated by Mr. Makoto Kobayashi, Professor, Tamagawa University

ワークショップに先駆けるインプットとして玉川大学教育学部小林亮教授により「地球市民教育と多文化共生—ユネスコが提唱する多文化共生への教育イニシアティブ—」と題して講演をしていただいた。講演では、(1)ユネスコの価値教育の振り返り(2)地球市民教育(GCED)の展望(3)地球市民性育成の今日的意味の3点が話された。その上で教育者は「平和のナビゲーター」とあるという教育者の大切な役割が話された。

続くグループディスカッションでは、以下の3つの問いを各テーブルで話し合った。

問1：あなたの教育実践において、地球市民性の育成や多文化共生の観点から、成果として挙げられるものは何ですか？

問2：あなたの教育実践において、地球市民性の育成や多文化共生の観点から、うまくいかなかったこと、課題として残ったことはありますか？

問3：これらをふまえ、「よき地球市民」とはどのような人でしょうか？

各グループで話し合われた内容は一部を次項に記す。

最後に、小林教授からの宿題として「このあと何をしますか？」との問いかけを残し、それぞれが起こす今後のアクションを期待させる形で、締めくくられた。

Professor Makoto Kobayashi of Tamagawa University gave a lecture titled “GCED and multicultural symbiosis—Educational initiative for multicultural symbiosis proposed by UNESCO.” In the lecture, he talked about three topics: (1) values of education of UNESCO, (2) prospects of GCED, and (3) fostering of Global Citizenship in the current sense. He concluded that educators have important roles and are the “Navigators of Peace.”

After that, all the participants in the workshop discussed three topics proposed by Professor Kobayashi:

Q1. In your educational practice, what have been the positive results in terms of fostering Global Citizenship and multicultural symbiotic societies?

Q2. In your educational practice, what are the difficulties and problem in terms of fostering Global Citizenship and multicultural symbiotic societies?

Q3. What is “good global citizen?”

At the end of the session, Professor Kobayashi assigned homework by asking, “What will you do next?” and finished the workshop expecting each participant to take action.



講演を行う小林教授

ディスカッション内容

- ✓ 地球市民教育に関する事業を展開する中で、当初は「私たちは国内のことをやっているのだから地球市民教育は必要ない」という意見もあった。しかし、事業を進める中で「地球市民教育は自分たちが既にやっていること、地域の中で行われていることと結びついている」ということに地域の人々が気づき、地球市民教育の意識が根付いていくことを感じられた。
- ✓ これまで、自分のできる範囲で継続的に交流活動を行ってきた。体験を通して他者理解を促すことを大切にしてきた。仲間を増やし、規模を大きくすることは、責任が大きくなってしまいうこともあり考えていなかったが、それは消極的な姿勢かもしれないという気づきがあった。
- ✓ 国際理解・国際交流は大切だが、身の回りにいる人に対する理解をおろそかにしてはいけない。自分の身の回りの差別や偏見、足元にある課題に目を向けることは「よき地球市民」であるための大切な条件と考える。
- ✓ 全員によるブレインストーミングにより出てきたキーワードをもとに、「よき地球市民」とは「あらゆる文化・伝統・宗教・自然環境を尊重し、受入れ、自然と協調して暮らす。また、共通する目標を共有している人」と定めた。
- ✓ ひとりの教員は海外への修学旅行に触れ、次のとおり続けた；修学旅行を通じて、新しい環境に身を置き、知らない人との出会うことが、他の国や文化・ひとに対する理解を促す上で重要な要素であるが、生徒の旅行先や現地の人に対する否定的な意見や感想を耳にして、教員としては驚き、修学旅行は生徒によい影響を与えず、失敗なのではないかと考えた。これに対し、別の教員から、このような経験は失敗ではなく、さらに問いかけることが大切であるという意見がでた。海外の人々との意思疎通が挙げられ、そのためには教育現場で修学旅行を含めた海外旅行や交流の機会を増やすことが大切であること締めくくられた。
- ✓ 「よき地球市民」とは、同じ仲間であること。「課題」は、お互いの意見を尊重しあい、歴史文化を学びあうことであると話し合った。
- ✓ 学校現場において地球市民教育と一緒に取り組む協力者をみつけることや、予算を確保することがとても難しい等の課題がある。
- ✓ 地域の事柄と世界の事柄は互いに関係していることを理解することが大切だ。
- ✓ 文化の交流や民間交流は相互理解と友好に大きく貢献していると思う。民間レベルでの重層的な関係は切っても切れず、国レベルの政治的危機において助けとなると考えられる。両国の相互理解と友好に大きな役割を持っている文化交流や民間交流は一層推進していくべきだと思う。
- ✓ 相互理解とは、異なる相手と同じようになるということではなく、違いがあるということを受け入れることであり、時にはお互いに受け入れられないことがあるという事を受け入れることが重要。また、世界のガバナンス・アジア地域の平和と安定という点では、日本は中国や韓国との関係を良好に保つことが重要だと思う。

Content of discussion

- ✓ Our organization has organised projects on Global Citizenship Education, and at first, some people said, "We do not need GCED because we are focusing on the matters in our country." However, through participating in the project, they found that their activities in their local areas are connected to GCED, and GCED actually already exists around them. I felt that the spirit of Global Citizenship was starting to take root in our society.
- ✓ I have exchanged with foreign countries continually, and to understand each other through experiences was always my core value. I did not think about enlarging my activities or exchanging with more people because I might have to take on more responsibility. However, through today's workshop, I learned that I may have a negative attitude.
- ✓ International understanding and international exchange are critical; however, we should not overlook understanding our neighbors. To be a good global citizen, we need to pay attention to discrimination, prejudice, and problems, which are going on around us.
- ✓ Defined a "good global citizen" as "a person who respects and accepts every culture, tradition, religion, and natural environment and lives together with nature. And who shares common goals with others." This definition was the result of group brainstorming.
- ✓ One teacher mentioned study trips abroad and continued as follows. Although exposing students to a new environment and meeting new people are essential parts of the trip to increase their understanding of other countries, cultures, and people, I heard some negative opinions and comments from our students about the destination and the local people. Thus, we were surprised, thought the effort was a failure, and did not expect a positive impact for students. However, one teacher opined that the study trips were not a failure, and that it was critical for us to ask further questions. The group concluded from the discussion that communication with people abroad would be a positive outcome in educational practice, and all group members agreed to increase opportunities, in an educational setting, for a trip abroad, including study trips and student exchanges.
- ✓ The discussion points focused on what good global citizen is and how to become one. We concluded that a good global citizen is a partner (who shares something with us) and that the "issues we have to overcome" are to learn to respect others' opinions and about others' history and culture.
- ✓ In schools, there are difficulties regarding finding colleagues who can work together on GCED and also secure a budget.
- ✓ It is critical to understand that local issues and global issues are linked.
- ✓ I think cultural exchanges at the citizen level contribute to mutual understanding and friendship and can help even in political crises at the nation level. Thus, those activities should be promoted.
- ✓ Mutual understanding is not to be the same as those who are different from us but to accept the differences and sometimes accept the difficulties of accepting them. It is critical to build strong relationships among Japan, South Korea, and China in terms of peace and stability in regional governance in Asia.

参加者からのコメント Comments by the participants

黒田一雄教授（早稲田大学大学院）

ACCU はこれまで 20 年間近く教職員国際交流事業を行ってきたのですが、韓国・中国・タイ・インドでも他国との教職員交流を行っていることが今回の会を通して報告されました。そのことから、世界的な方向性として GCED や ESD を推進していこうという流れがあり、その中にこの教職員国際交流事業が位置付くのではないかと思います。教職員交流をめぐる世界的な枠組みや推進方針については今まできちんと議論されてきていなかったと思うので、この場が正に第一回目となったと思います。これから継続してこのような会を行うことによって、事業を世界的なコンテクトの中で位置づけて、より意味のあるものにする方向性を作っていける素晴らしい第一歩に今日の会はなったのではないかと思います。

Mr.Santosh Sutar（インド環境教育センター）

今回のエキスパートミーティングと報告会は、私の考えに大きな影響を及ぼし、この教職員国際交流事業がいかに重要なものであるかを認識しました。特にインドは隣国との対立や問題が多くあるため、GCED はインドという国にとって非常に重要です。また、今回は非常に多くの教職員の国際交流事業が様々な国で行われているということを知ることができ、そう言った意味でもこの二日間はとても素晴らしい機会となりました。次回のインドのプログラムはより強化・改善されたものにしたいと思います。そしてまた、この教職員国際交流事業が今後より実りあるものになることを祈っています。

Professor Kazuo Kuroda, Graduate School of Waseda University

The ACCU has been organizing the International Teachers Exchange Programme for nearly 20 years, and it is reported that South Korea, China, Thailand, and probably India have also been implementing exchange programmes with other countries as well. Thus, I think there is a global trend to promote GCED and ESD, and the International Teachers Exchange Programme is situated in this context. I think the global framework and promotion policy for teacher's international exchange has not been fully discussed; therefore, this was the first occasion for that. This occasion became a wonderful first step toward developing a direction to hold this type of conference regularly and to situate the programme in a global context to make our programme more meaningful.

Mr. Santosh Sutar, Center for Environment Education

This expert meeting and conference has really influenced my thought and has made me realize how this International Teachers Exchange Programme is critical. Most notably, GCED is critical from the Indian perspective because of the many conflicts and problems with neighboring countries. Additionally, I learned that there are so many activities related to international exchange programmes for teachers going on in each country. In this regard, these two days have been full of really wonderful opportunities. I will ensure that the next programme in India will be enhanced and improved. I hope the success of this International Teachers Exchange Programme will increase.

大安喜一 (ACCU)

この二日間で様々なお話を聞き、この教職員交流事業はそれ自体が目的なのか、それとも大きな目的のための手段なのかについて考えたのですが、おそらく両方なのではないかと思いました。つまり、教員の方々が異文化を肌で知って交流するという目的と、そしてより大きな目的として国家間の相互理解と友好の促進や世界平和などがあるのではないかと思います。ACCU や APCEIU などの機関は大きな目的に対して、個人の研修で終わらせずにいかに学校全体に波及させ、政策にまで影響をさせるかについて考えなければならないと思います。また、学びをいかに行動に反映させるかということも重要で、先生方が教育現場でロールモデルになって色々な活動をして、同僚の先生や保護者に波及させることが重要だと思います。複雑な問題に対する目標である SDGs 達成のためには、様々なアクターの Collective impact が必要になるといわれていますが、この教職員交流プログラムを発展させるためには、学校を中心にしてコミュニティといかに協力するかという視点が必要なのではないかと思います。

進藤由美 (ACCU)

二日間、本当にありがとうございました。ACCU は事業運営者として教職員交流事業を 20 年近く運営してきているのですが、この事業の現場は私達のところではなく、先生方のところにあります。今日のような機会では先生方の意見や提案事項を聞かせていただけたことが ACCU にとっての成果になります。先生方は現場に戻られて、日々の学校生活で様々な事に取り組まれていると思いますが、その中に ACCU も居て、一緒に頑張っていきたいと思っています。

Mr. Kiichi Oyasu, ACCU

I heard many presentations in those two days, and I have been thinking about whether this International Teachers Exchange Programme itself is a purpose or a means for the main purpose, and I have concluded it is both. I think there are two purposes: for teachers to directly experience different cultures and to promote mutual understanding and friendship at the country level and world peace. Regarding the main purpose, organisations such as the ACCU and APCEIU have to think about how they can spread the impacts of the programme from teachers to the whole school and even to national policy, not merely implementing the programme. Additionally, teachers must put the learning from the programme into action; thus, we would like each teacher to become a role model and influence colleagues and students' parents. Collective impacts are said to be required to achieve the SDGs, and I guess this teachers' programme also requires the perspective to cooperate with the community around the school for further improvement.

Yumi Shindo, ACCU

Thank you, everyone, so much, for the past 2 days. The ACCU has been implementing the International Teachers Exchange Programme for almost 20 years as the organiser; however, the exact implementation of this programme is not with us but is in the teachers' classroom or school. We achieved the exact intended outcomes of this process, that is, hearing the opinions and suggestions from teachers. I guess teachers are managing many issues at school every day, and we would just like teachers to remember that the ACCU is always with you and will go through the process with you.

成果 Outcomes

- (1) 過去の教職員国際交流プログラムに参加した教職員から、プログラムに参加したことによって生まれた学校での活動、プログラム参加後の自己変容や教育活動に対する価値観の変化、さらには生徒、児童の変化が共有された。
- (2) 上記活動に対して、プログラム実施運営者や専門家からフィードバックがなされた。
- (3) 専門家、教職員、交流プログラム実施運営者がともに、地球市民教育（GCED）や多文化共生社会とは何か考えた。
- (4) 教職員国際交流プログラムの意義について振り返った。

- (1) The school activities that were initiated by the participation in the international teachers exchange programmes, the changes in teachers and their educational value, and the changes in their students were shared by participants of past programmes.
- (2) Feedback received regarding the aforementioned activities by programme organisers and experts.
- (3) The experts, teachers, educational administrators, and programme organizers considered what GCED is and multicultural symbiosis societies.
- (4) Reviewed the value of the international teacher's exchange programmes.



専門家、プログラム実施運営者、教職員が一緒に真剣な議論をした

2019年2月23日(土)
公益財団法人ユネスコアジア文化センター
国際教育交流事業報告会&ワークショップ

**持続可能な社会のための国際理解・平和構築における
教員交流の役割**

黒田一雄
早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授
ユネスコアジア文化センター評議員



グローバリゼーションと教育の国際化

- ✦ グローバリゼーションー「社会・経済・科学技術等のあり方が地球規模で連動する、広範で構造的な変容」(Altbach 2006)ー人の国際移動の爆発的拡大、情報通信技術の長足の進歩、社会経済のグローバル化
- ✦ 社会経済のグローバル化により、様々な課題が国境を越え、その認識 (Recognition)や解決 (Solution)、方向付け (Direction)が、個別の国家による政策的関与のみでは不可能になっている。
- ✦ このような国境を越えた課題を、国家の連携や国際機関、市場や市民社会等の様々なアクターによって構成される国際社会が、認識し、解決し、新たな方向性を見いだそうとする営みとして「グローバルガバナンス」が形成されつつある。(Commission on Global Governance 1995、Weiss and Thakur 2010、Weiss 2011、Sinclair 2012等)
- ✦ 従来国民国家の単位で考えられてきた教育も、現在ではグローバルガバナンスの対象となっている。

歴史的なコンテクストー平和のための教育

ユネスコ憲章・前文

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて、世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。よって、政府の政治的および経済的取り決めのみに基づく平和は永続する平和ではなく、**人類の知的及び精神的連帯の上に平和は築かなければならない**」

平和のための教育

世界人権宣言(1948)第二十六条

2. 教育は、人格の完全な発展並びに人権及び基本的自由の尊重の強化を目的としなければならない。教育は、すべての国又は人種の若しくは宗教的集団の相互間の理解、寛容及び友好関係を増進し、かつ、平和の維持のため、国際連合の活動を促進するものでなければならない。

基本的人権としての教育/教育の平等

世界人権宣言(1948)第二十六条

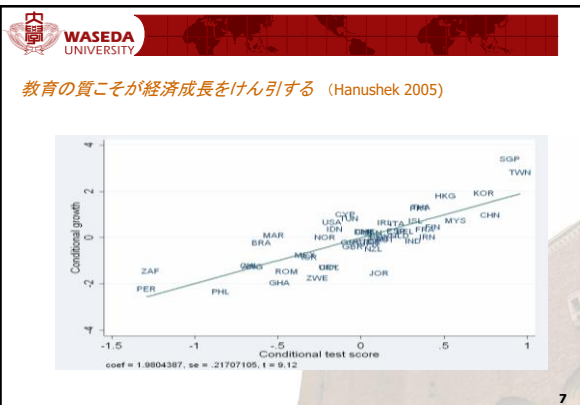
1. **すべて人は、教育を受ける権利を有する。**教育は、少なくとも初等の及び基礎的の段階においては、無償でなければならない。初等教育は、義務的でなければならない。技術教育及び職業教育は、一般に利用できるものでなければならない。また、高等教育は、能力に応じ、すべての者にひとしく開放されていなければならない。

✦ “(UNESCO) instituting collaboration among the nations to advance the ideal of equality of educational opportunity without regard to race, sex or any distinctions, economic or social”
- Article 1, Legal Instruments: UNESCO Constitution (1945)

開発のための教育

世界銀行「包括的開発枠組みへの提案」
「社会経済開発と貧困削減の最も重要な鍵は教育である」

教育、特に初等教育の経済成長・社会開発への高い貢献は教育経済学・教育社会学による様々な実証研究で明らかにされてきた。

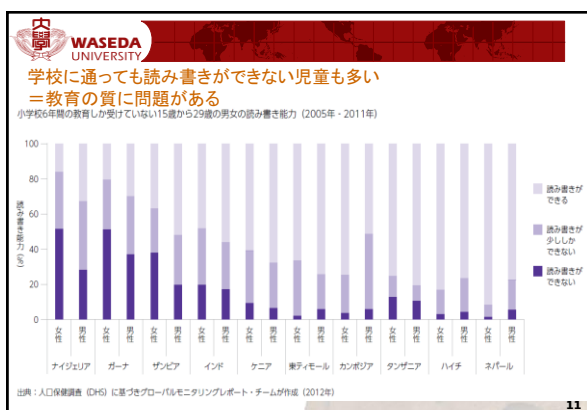
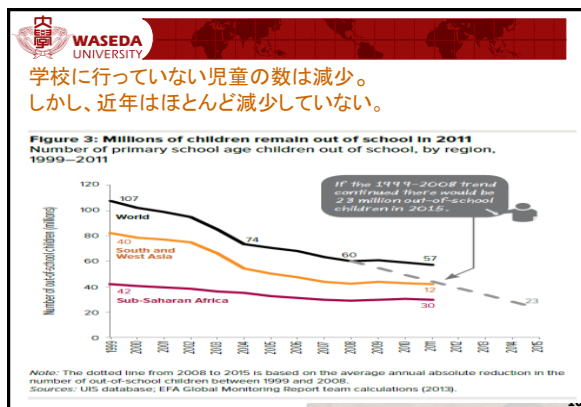


WASEDA UNIVERSITY

ミレニアム開発目標(2000)

1. 極度の貧困と飢餓の撲滅
2. 普遍的初等教育の達成
 - ◆ ターゲット2A: 2015年までに、全ての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする。
3. ジェンダーの平等の推進と女性の地位向上
 - ◆ ターゲット3A: 初等・中等教育における男女格差の解消を2005年までには達成し、2015年までに全ての教育レベルにおける男女格差を解消する。
4. 幼児死亡率の削減
5. 妊産婦の健康の改善
6. HIV/エイズ、マラリアその他疾病の蔓延防止
7. 環境の持続可能性の確保
8. 開発のためのグローバル・パートナーシップの推進

8



WASEDA UNIVERSITY

MDGs/EFAに対する批判や指摘された課題

- ◆ 教育の内容や目的についての議論がない。
- ◆ 何のためのEFAなのか、明確でない。
- ◆ 教育親や人間親が欠如した目標設定となっている。
- ◆ 教育の質がきちんとモニタリングされていない。指標化に課題がある。

13

WASEDA UNIVERSITY 持続可能な開発目標(SDGs, 2015-30)

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標

国際連合広報局

13

WASEDA UNIVERSITY

目標4: すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する

4 質の高い教育をみんなに

国際連合広報局

14

WASEDA UNIVERSITY SDGs 第4目標

目標4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

4.1 2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、適切かつ効果的な学習成果をもたらす、無償かつ公正で質の高い初等教育及び中等教育を修了できるようにする。

4.2 2030年までに、すべての子どもが男女の区別なく、質の高い乳幼児の発達・ケア及び就学前教育にアクセスすることにより、初等教育を受ける準備が整うようにする。

4.3 2030年までに、すべての人々が男女の区別なく、手の届く質の高い技術教育・職業教育及び大学を含む高等教育への平等なアクセスを得られるようにする。

4.4 2030年までに、技術的・職業的スキルなど、雇用、働きがいのある人間らしい仕事及び起業に必要な技能を備えた若者と成人の割合を大幅に増加させる。

15

WASEDA UNIVERSITY SDGs 第4目標

目標4. すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

4.5 2030年までに、教育におけるジェンダー格差を無くし、障害者、先住民及び脆弱な立場にある子どもなど、脆弱層があらゆるレベルの教育や職業訓練に平等にアクセスできるようにする。

4.6 2030年までに、すべての若者及び大多数(男女ともに)の成人が、読み書き能力及基本的計算能力を身に付けられるようにする。

4.7 2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

16

2015 PISA AVERAGE SCORES

Math		Reading		Science	
Singapore	564	Singapore	535	Singapore	556
Hong Kong	548	Hong Kong	527	Japan	534
Macao	544	Canada	527	Estonia	534
Taiwan	542	Finland	526	Chinese Taipei	532
Japan	532	Ireland	521	Macao	531
China*	531	Estonia	519	Canada	528
Korea	524	Korea	517	Viet Nam	525
Switzerland	521	Japan	516	Hong Kong	523
Estonia	520	Norway	513	China*	518
Canada	516	New Zealand	509	Australia	510
Netherlands	512	Germany	509	New Zealand	513
Denmark	511	Macao	509	Slovenia	513
Finland	511	Poland	506	Australia	510
Slovenia	510	Slovenia	505	United Kingdom	509
Belgium	507	Netherlands	503	Germany	509
Germany	506	Australia	503	Netherlands	509
Poland	504	Sweden	500	Switzerland	506
Ireland	504	Denmark	500	Ireland	503
Norway	502	France	499	Belgium	502
Austria	497	Belgium	499	Denmark	502
New Zealand	495	Portugal	498	Poland	501
Viet Nam	495	United Kingdom	498	Portugal	501
Russia	494	Taiwan	497	Norway	498
Sweden	494	United States	497	United States	496
Australia	494	Spain	496	Austria	495
France	493	Russia	495	France	495
United Kingdom	492	China*	494	Sweden	493
Czech Republic	492	OECD Average	493	OECD Average	493
Portugal	492	Switzerland	492	Czech Republic	493
OECD Average	490	Latvia	488	Spain	493
Italy	486	Czech Republic	487		

WASEDA UNIVERSITY Collaborative Problem Solving Skill (OECD, 2015)

Education system	Average score
OECD average	500
Singapore	561
Japan	552
Hong Kong (China)	541
Korea, Republic of	538
Canada	535
Estonia	535
Finland	534
Macao (China)	534
New Zealand	533
Australia	531
Chinese Taipei	527
Germany	525
United States	520
Denmark	520

18

WASEDA UNIVERSITY **ダイバーシティは21世紀型学力形成への鍵?**

21ST-CENTURY SKILLS

ATC21S started by internationally defining 21st-century skills as four broad categories.

WAYS OF THINKING
 Creativity and Innovation
 Critical thinking, problem-solving, decision-making
 Learning to learn/metacognition (knowledge about cognitive processes)

TOOLS FOR WORKING
 Information literacy
 Information and communication technology (ICT) literacy

WAYS OF WORKING
 Communication
 Collaboration (teamwork)

WAYS OF LIVING IN THE WORLD
 Citizenship - local and global
 Life and career
 Personal and social responsibility - including cultural awareness and competence

Source: ATC21S (2013)

WASEDA UNIVERSITY **教育をめぐる世界的潮流**

- ✦ 高まる教育の質への注目ーPISA他のグローバルな教育の質のモニタリング
- ✦ 21世紀型スキル、ソフトスキル、非認知的学力への傾斜
- ✦ SDGs・教育のグローバルガバナンスは、明確に平和や持続可能性への傾斜を強めている。

WASEDA UNIVERSITY **進展するアジアの地域的国際連携**

進展するアジア地域内の相互依存

- アジア域内の協力フレームワークの形成
- ✦ ASEAN(1967年創設、2015年統合目標)
- ✦ アジア太平洋経済協力 (APEC、1989年)
- 環太平洋経済連携協定 (TPP11)
- ✦ ASEAN+3 (1997年)
- ✦ 東アジアサミット インド含むASEAN+6 (2005年)
- ✦ 日中韓サミット (2008年)
- 政治経済における「アジアのアジア化」

WASEDA UNIVERSITY **米仏英における留学生数**

	1986	1996	2015	2015/1986
米国	349, 610	453, 787	907, 251	2. 595
フランス	126, 762	170, 574	239, 409	1. 889
英国	56, 726	197, 188	430, 687	7. 592
Total	533, 098	821, 549	1, 577, 347	2. 959

Source: UNESCO Statistical Yearbook (1988) UNESCO Global Education Digest (2017)

WASEDA UNIVERSITY **日中韓における留学生数**

	1986	1996	2015	2015/1986
中国	6, 174	41, 211	192, 358 ⁽²⁰¹⁴⁾	31. 156
韓国	1, 309	2, 143	54, 540	41. 665
日本	14, 960	53, 511	131, 980	8. 822
Total	20, 612	78, 409	424, 704	20. 604

Source: UNESCO Statistical Yearbook (1988) UNESCO Institute of Statistics (2018) Chinese Ministry of Education (2014)

WASEDA UNIVERSITY **アジアの留学生域内交流の拡大**

東アジアからの留学生95万人のうち、東アジアへ40万人、北米へ30万人、ヨーロッパへ20万人 (UIS) が留学

アジア域内の留学生数の増加 受入留学生数 (1999年⇒2010年)

中国

902
↓ (5072%)
45,757

11,731
↓ (532%)
62,442

12,784
↓ (130%)
16,808

25,655
↓ (337%)
86,553

日本

18,330
↓ (140%)
25,660

551
↓ (208%)
1,147

715
↓ (198%)
1,420

242
↓ (249%)
604

韓国

1,147
↓ (2028%)
3,449

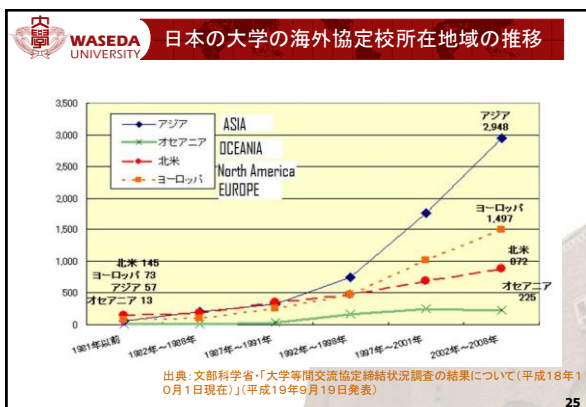
ASEAN

6,256
↓ (856%)
54,790

1,387
↓ (1271%)
17,633

5,296
↓ (232%)
12,326

出典: UNESCO Statistical Yearbook, UNESCO Global Education Digest, 『中国教育統計年鑑』、中華人民共和國外務省ウェブサイト、及び文部科学省『日本人の海外留学状況』にもとづき北村友人民作成



25

WASEDA UNIVERSITY 協定締結相手の上位5か国・地域と協定数

順位	国名	平成24年	平成27年
1	中国	3,871	5,607
2	米国	2,652	3,640
3	韓国	2,228	3,154
4	台湾	1,001	1,893
5	英国	895	
5	タイ		1,441

海外の大学との大学間交流協定、海外における拠点に関する調査結果（文部科学省平成24年・27年調査）

26

- WASEDA UNIVERSITY**
- ✦ アジアからアジアへの留学生数の急激な拡大
東アジアからの留学生95万人のうち、東アジアへ40万人、北米へ30万人、ヨーロッパへ20万人（UIS 2011）
 - ✦ デファクトで進むアジア域内の教育連携の拡大
→教育においても進む「アジアのアジア化」

27

- WASEDA UNIVERSITY アジアの教育交流のための政策的フレームワーク**
- アジア域内の教育政策対話促進
 - ✦ Southeast Asian Minister of Education Organization (SEAMEO) 1965
 - ✦ ASEAN教育大臣会合 2006
 - ✦ Asia Pacific Economic Cooperation (APEC) 1989
 - ✦ ASEAN+3→政策対話 2009
 - ✦ 東アジアサミット 2005
 - ✦ 日中韓サミット→Campus Asia 2012
 - 多層的な政策的フレームワークの形成

28

- WASEDA UNIVERSITY アジアの教育交流フレームワークの課題**
- 地域内の教育交流は何を目指すのか？
→地域相互理解・平和への貢献
ヨーロッパの域内教育交流・協力の基礎
「機能的な協力の進展が平和の実現の基となる」
（社会構成主義、Haas 1958）
「機能的な協力の深化は、人の価値観を収斂させることを通じて地域統合に貢献する」
（多元的安全保障共同体論、Deutsch 1957）
→アジア市民意識の形成・域内の相互理解
→ASEAN社会文化共同体・ASEANessの模索

29

- WASEDA UNIVERSITY**
- 第1回東アジアサミット「クアラルンプール宣言」
- ❖ 6. われわれは、「われわれ」意識の形成を目指した人と人の交流を強化する。
 - ❖ 7. われわれは、東アジア諸国の学生、学者、研究者、芸術家、メディア及び青少年の間の更なる相互交流を通じた考え方の共有を促進する。
 - ❖ 8. われわれは、不寛容と闘い、かつ、文化・文明間の理解を改善するため、知識と理解の深化を通じて東アジア及び世界が裨益するような、知識人、シンクタンクのメンバー、宗教家及び学者の間の恒常的な交流を行う。
- 平和で豊かなアジアを目指す域内教育交流

30

二国間関係の中の教育交流

- ❖ 日中間－歴史認識・領土問題、世界第二と第三の経済大国・中国の世界的プレゼンス拡大
- ❖ 日韓間－横たわる歴史認識・領土問題、共通する政治的価値観
- ❖ 日タイ間－ASEANの中核国、親日的な土壌
- ❖ 日印間－勃興する経済大国、南アジアの中核国

31

ACCU教員交流の目的

- ❖ 「ユネスコ精神の普及と実現にむけて、異文化理解、相互理解、国際協力、教育の質的向上を促進する」(ACCUホームページ)

32

ACCU教員交流の効果

- ❖ 参加教員のグローバルシチズンシップの向上
- ❖ 参加教員のグローバルコンピテンシーの向上
- ❖ 参加教員の相手国理解の向上
- ❖ →参加教員による学校現場での報告・実践
- ❖ →教育の質の向上
- ❖ →学生・生徒のグローバルコンピテンシーの向上
- ❖ →学生・生徒のアジア人意識・地球市民意識(グローバルシチズンシップ)の涵養
- ❖ →二国関係の改善・アジア地域の安定
- ❖ →世界の平和と持続可能な発展

33

教員交流の効果に関する教育学的展望

- ❖ 国際理解教育
- ❖ 異文化間コミュニケーション教育
- ❖ 多文化教育
- ❖ 開発教育
- ❖ 平和教育
- ❖ 地球市民教育
- ❖ ESD(持続可能な開発のための教育)

34

教育交流の平和に対する効果に関する理論的展望

- ❖ コンピテンシー論－異文化対応力、紛争解決能力、和解力(Byram 1997)
- ❖ 異文化理論－異文化への柔軟性(Bennett 1993)、異文化適応性、アイデンティティの形成と保持(Chickering 1969)
- ❖ 紛争解決論－紛争解決段階論、紛争解決の二重性論(Blake and Mouton 1964)、紛争変容論(Schirch 2004)
- ❖ 平和教育論－消極的・積極的平和論(Galtung 1975)、平和構築論(Anstey 2006)

35

例えば接触仮説(Contact Hypothesis)

- ❖ 相互理解のためには接触(直接的なコンタクト)は有効
- ❖ しかし、それだけでは十分ではなく、以下の条件を実現する必要がある(Allport 1979)。
 - (1)参加者の対等の関係性
 - (2)グループ内の共同作業
 - (3)共通した目標の設定
 - (4)社会的・組織的他者からのサポート
 →教員交流プログラムへの適応可能性

36

WASEDA
UNIVERSITY

ACCU教員交流の課題

- 参加によって教員のグローバルコンピテンシーは向上しているか。
- 参加によって教員のグローバルシチズンシップは向上しているか。
- 参加によって教員の相手国理解は向上しているか。

→計測とフォローアップの必要性

37

WASEDA
UNIVERSITY

海外留学の結果(大学・大学院)卒業(修了)の結果)、次のような意識がどの程度高まったと思いますか。(GJ5000調査 2016)

項目	100%	80%	60%	40%	20%	0%
1日本人としての意識が高まった	10.4	45.0	42.1	20.8	23.0	49.2
2アジア人としての意識が高まった	30.5	36.5	35.2	15.8	23.7	52.1
3地球市民としての意識が高まった	23.9	48.4	32.2	23.4	48.0	37.9
4政治・社会問題への関心が高まった	12.9	53.5	30.8	19.0	47.2	30.6
5外交・国際関係への興味が高まった	32.7	42.8	16.9	20.0	47.2	25.6
6環境・貧困問題等の地球的問題に対する意識が高まった	25.5	46.9	21.0	19.0	48.2	25.8
7平和に対する意識が高まった	13.0	48.0	36.2	24.9	42.4	27.0
8多様な価値観や文化的背景を持つ人と共存する意識が高まった	34.5	40.3	16.5	24.3	45.1	25.3
9社会での男女共同参画の意識が高まった	30.2	41.9	19.9	20.4	47.3	27.3
10性別に問わず家庭内における役割を担うことへの意識が高まった	25.9	45.1	21.7	16.3	45.7	34.9
11宗教に関する寛容性が高まった	22.7	48.4	24.8	25.6	45.6	24.7
12リスクを犯ること、チャレンジすることに関する意識が高まった	26.9	46.7	19.1	29.0	43.6	21.4
13価値判断を習慣して、なぜそうなのかを考えようとするようになった	24.3	50.2	23.5	32.0	42.4	20.9
14自己肯定感(自信)が高まった	23.8	53.3	23.0	35.0	40.8	19.7
15自己効力感(自分はやるべきことを実行できるという意識)が高まった	23.3	46.0	24.6	29.4	45.8	24.8

38

WASEDA
UNIVERSITY

留学の結果(大学・大学院の学生生活で)、次のような能力が向上したと思いますか。(GJ5000調査 2016)

項目	100%	80%	60%	40%	20%	0%
1専門知識・技能	4.4	22.0	48.5	25.0	20.9	51.8
2基礎学力・一般教養	2.2	17.5	56.3	24.1	22.6	53.3
3外国語運用能力	1.0	10.4	51.1	41.2	19.6	54.5
4コミュニケーション能力	1.2	10.4	52.3	36.3	22.1	40.4
5留学先の社会・習慣・文化	0.7	7.2	56.3	35.8	11.3	52.2
6リーダーシップ	9.4	43.9	35.8	11.1	22.7	53.1
7積極性・行動力	2.0	16.3	51.6	30.2	42.3	39.1
8異文化に対応する力	0.8	8.2	51.5	41.5	22.6	50.7
9ストレス耐性	2.3	18.6	52.1	27.0	38.1	39.9
10目的を達成する力	2.0	18.5	54.2	25.3	11.0	47.5
11柔軟性	1.4	12.7	55.9	29.9	49.8	34.1
12協調性	2.7	23.3	54.4	19.6	54.2	28.6
13社交性	2.2	17.1	54.6	26.1	50.2	33.4
14創造力	4.4	30.9	46.7	18.8	37.8	43.6
15忍耐	2.2	18.9	53.1	25.9	45.0	34.9
16問題解決能力	2.4	19.8	55.6	24.3	46.5	32.2
17批判的思考力	4.4	31.3	45.3	18.9	36.1	44.7
18論理的思考力	3.6	28.2	48.9	19.4	47.4	30.4

39

WASEDA
UNIVERSITY


- 教員交流は、「ユネスコ精神の普及と実現にむけて、異文化理解、相互理解、国際協力、教育の質的向上を促進する」ために有効な方策。
- そのためには、今後もプログラムを変革し、その効果をモニタリングする必要がある。

40

WASEDA
UNIVERSITY

Thank you!

41



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

Asia-Pacific Centre of
Education for International Understanding
under the auspices of UNESCO

Promoting International Understanding through Teacher Exchange Programmes

Dr Utak Chung
Director
Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding (APCEIU)




Table of Contents

I. APCEIU Initiatives on GCED


1. Capacity-Building of Educators


2. Research and Policy Development

3. Material Development and Information Dissemination

4. Networking and Partnerships

II. International Teacher Exchange Programme:
Impact, Challenges, and Ways Forward





APCEIU's Initiatives on Global Citizenship Education



Working with **UNESCO Member States**, and expanding globally to promote a **Culture of Peace** through **Global Citizenship Education**

(1) Capacity-Building of Educators

(2) Research and Policy Development

(3) Material Development and Information Dissemination

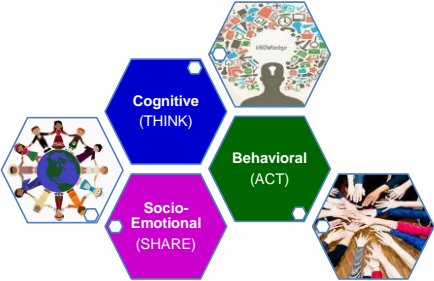
(4) Networking and Partnerships






GCED Programme Framework

Providing transformative moments thru holistic, participatory approaches





Programme Area 1 Capacity-Building of Educators





Empowering Educators for Global Citizenship Education

✓ Quality educators are the key to inclusive, relevant quality education that can effectively address GCED concepts



• To strengthen educators' capacity in supporting and implementing GCED

• National / Regional / Global workshops held annually based upon the conceptual framework of GCED

• Emphasize learner-centered, active and collaborative pedagogical approaches



Global Capacity Building Workshop on GCED



25 August – 7 September 2019, Seoul, Republic of Korea

- Senior-level alumni globally, working on different areas of education
- Follow-up Activity Support introduced in 2017 (Philippines, Indonesia)



Global GCED Workshop Themes

Follow-up Activities



GCED Workshop for Teacher Education
24-26 Oct 2017
Manila, Philippines



National Training Workshop on GCED
22-24 Nov 2017
Jakarta, Indonesia



GCED Lead Teachers Programme



- Objective: to promote GCED teaching and learning in Korean schools
- Regular meetings and support for research at the local level GCED Lead Teachers
- More than 3,000 teachers involved since 2015



GCED Lead Teacher in 2019
GCED National Lead Teachers: 67
GCED Local Lead Teachers: 625



GCED Lead Teacher's Case Book (2015-2017)



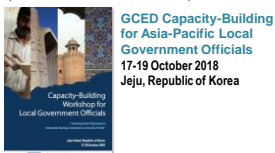
GCED Capacity-Building of Local Government Officials



▲ Sub-Regional Workshop on GCED
26-28 June 2018, New Delhi, India
(in collaboration with UNESCO New Delhi)



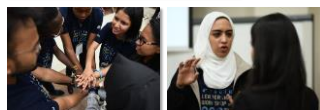
▲ National Workshop on GCED
15-17 Feb 2017, Islamabad, Pakistan
(in collaboration with UNESCO Islamabad)



Youth Leadership Workshop on GCED



- Objective: to enhance the capacity of youth leaders to lead and advocate GCED
- Bringing together 50 dynamic youth leaders active in youth engagement activities promoting GCED, education and SDGs
- Supporting youth-led initiatives thru GCED Youth Network



3 – 9 June 2019, Seoul, Republic of Korea



Online GCED Training Courses



GCED www.gcedonlinecampus.org
ONLINE CAMPUS

- Introductory Courses on GCED (15 learning units in 5 Modules)
- Advanced Courses on GCED



Programme Area 2 Research and Policy Development



GCED Curriculum Development and Integration (1)



In partnership with



- Objective: to support GCED integration into national and/or local curricula of UNESCO Member States
- 1st Cycle (2016-2018): Cambodia, Mongolia, Uganda, Colombia
- 2nd Cycle (2019-2021): Philippines, Sri Lanka, Lebanon, Kenya

YEAR 1

Establishment of the Mechanism for GCED Curriculum Development

YEAR 2

Development of GCED Curriculum and pilot-testing


YEAR 3

Dissemination, Field-application, Monitoring Mechanism and Networks


APCEIU

GCED Curriculum Development and Integration (2)


Country	Expected Output
Cambodia	GCED-integrated Natl Curriculum (History & Moral Civics)
Colombia	Teachers' Guide on GCED
Mongolia	Teachers' Guide on GCED
Uganda	GCED Teaching & Learning Materials




▲ Monitoring photos from Cambodia and Uganda



▲ GCED Teaching and Learning Materials from Uganda




▲ GCED Teacher's Guide from Mongolia



APCEIU


GCED Integration Curricular Support in Korea

Teacher's Guide for GCED



- ✓Elementary, middle and high school levels
- ✓Reflecting the 2015 Revised Korean National Curriculum

GCED Workbooks



- ✓Student workbook and teachers' guide
- ✓Developed by teachers, includes various activities

APCEIU

Support for GCED Course Development in Higher Education Institutions

APCEIU aims to identify qualified universities and support the development of GCED Courses

10 Korean universities supported in 2019 (33 courses supported up-to-date)

PHASE 1

Call for Applications

PHASE 2

Selection

PHASE 3

- Consult on GCED course design
- Providing financial subsidies (\$5,000 - \$10,000)
- Workshop for sharing outcomes



APCEIU

Programme Area 3

Material Development and Information Dissemination





APCEIU

Global Citizen Campus

- Objective: to provide GCED learning opportunities to visiting students at the experiential learning space
- Customized programmes for visiting groups (upon request)
- Currently developing the **Mobile Global Citizen Campus**; open for partnership/collaboration



Global Citizen Campus

GCED Experiential Learning Space for Secondary School Students

10,000 Visitors since 2016



APCEIU

GCED Material Development (1)



▲ GCED Boardgame, "Changers"



▲ GCED Online Game, "Go! Global Citizens!"

Developing **creative and interactive GCED materials** that can be used in classrooms and in communities



▲ GCED Online Quiz, "What Type of Global Citizen Are You?"



GCED Material Development (2)

UNESCO GCED Clearinghouse

hosted by APCEIU



www.gcgedclearinghouse.org

✓ Available in English, French, Spanish, Arabic and Korean (Russian and Chinese in 2018)

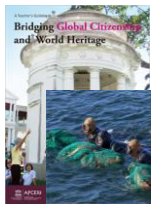
EIU Best Practices



Sangsaeng
(available in English, French)



GCED Material Development (3)



World Heritage Education

2013 - Bagan
2014 - Angkor Wat
2015 - Samarkand, Bukhara
2016 - Melaka (English)
2017 - Almaty (Russian)
2018 - Jeju Island (Korean)



Teaching
Global Citizenship
through
World Heritage



Programme Area 4

Networking and Partnerships



United Nations GCED Seminar



▲ 2018 UN GCED Seminar
26 April 2018, UN Headquarters, New York



Objective: to promote dialogue and leadership on GCED with UN Permanent Delegations



United Nations GCED Seminar

Follow-up Activities



UN GCED Group of Friends (GOF) Meeting
30 May 2018, UN Headquarters

"GCED as a Key Enabler of the SDGs"
13 November 2018, UN Headquarters



International Conference on GCED



3-4 September 2019 | Seoul, Republic of Korea
Dragon City Hotel, Seoul

GCED Network Activities and Major Outcomes (2016-2018)



2016 GCED Global Network Meeting

9-11 November 2016 | Seoul, Republic of Korea

- Participation from **36 institutions** from **5 global regions** participated
- GCED Network Establishment Final Outcome Document

GCED Network Goals

Accelerator

The GCED Network envisions to **raise the impact and accelerate GCED** delivery mechanisms towards the achievement of SDG 4.7

Bridge

The GCED Network aims to **bridge the different institutions and organizations** working on GCED.

Community

The GCED Network aims to **build an epistemic community and community of practice**

Regional GCED Networks



2017 Africa Regional GCED Network Meeting

6-7 April 2017 | Johannesburg, South Africa



2017 Arab States Regional GCED Network Meeting

13-14 October 2017 | Luxor, Egypt



2017 LAC Regional GCED Network Meeting

23-24 October 2017 | Chile, Santiago



2018 Asia-Pacific Regional GCED Network Meeting

3-4 May 2018 | Jakarta, Indonesia

Regional GCED Networks



2018 Europe and North America Regional GCED Network Meeting

21-22 November 2018 | Lisbon, Portugal



Technical Consultation Meeting on the GCED Network

5-6 September 2018 | Seoul, Republic of Korea

GCED Network Future Activities

- Official launch of the "UNESCO-APCEIU GCED Actors Platform"
- Regional Follow-up Activities, based on identified regional priorities together with key partners and members

International Teacher Exchange Programme

Impact, Challenges, and Way Forward

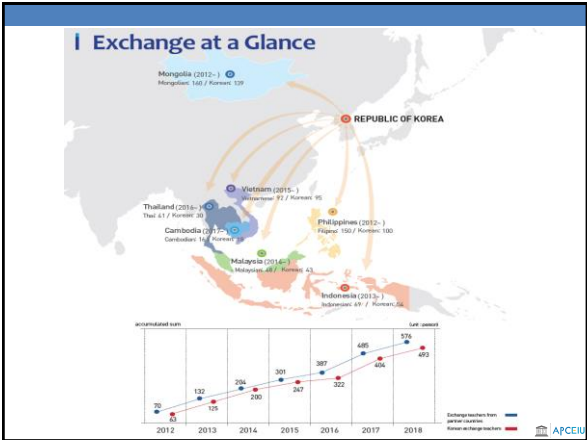


Bringing Teachers, Schools and Governments Together

More than **1,000 teachers** since 2012

Overview

- Launched by the **Ministry of Education, ROK** in 2012
- Bilateral Exchange Programme between the Republic of Korea and its partner countries
(2012) Mongolia, Philippines, (2013) 2 countries + Indonesia, (2014) 3 countries + Malaysia, (2015) 4 countries + Vietnam, (2016) 5 countries + Thailand, (2017) 6 countries + Cambodia, (2018-9) 7 countries
- Hosted and Sponsored by the **Ministry of Education of the Republic of Korea**
- Implemented by the **Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding** under the auspices of **UNESCO (APCEIU)**
- In collaboration with the **Ministry of Education/ Department of Education of the respective partner country**



Goals and Objectives

- Sharing and exchange experiences and innovations on education system and teaching-learning methods
- Enhancing invited teachers' capacities in teaching, policy perspectives, and global education
- Building mutual understanding, cooperative relationship, and education networks between S. Korea and Cambodia

Expected Outcomes – participating teachers and host schools

- Teaching-learning and global competencies and intercultural literacy enhanced
- Mutual understanding, friendship, and cooperative networks built and strengthened
- Global citizenship education promoted

APCEIU

Background/Underpinning Frameworks

- Paradigm shift in education
- Changing domestic, regional, and international environments (*and needs*) for Education
- Global visions and promises on Education:
 - Sustainable Development Goals (SDGs) Goal 4 / Education 2030 (4.7, 4c)

APCEIU

Teacher Exchange

in the framework of GCED

APCEIU

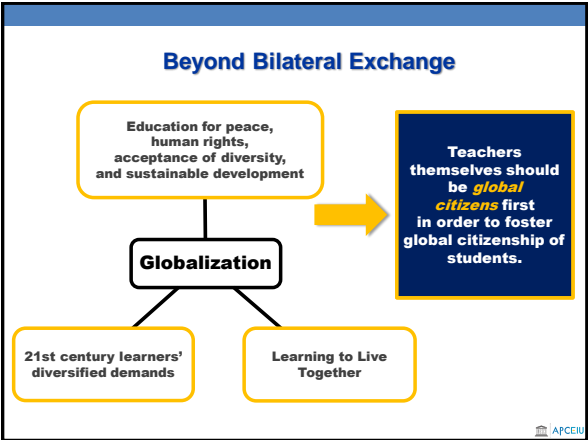
Expected Outcomes

- In the framework of bilateral exchange
 - Mutual understanding and cooperation between two countries
 - Exchange of knowledge, ideas, and practices on education systems and pedagogies between two countries
 - Further development of education and quality enhancement in each country
- Beyond the bilateral framework
 - Intercultural literacy
 - Global citizenship
 - Global competencies

New educational vision, Global vision

- to enhance one's capacity for life and work ("21 C. competences")
- to live together
- to build a sustainable and peaceful society

APCEIU



Educational Activities of Exchange Teachers



Network Building / SSAEM Conference



Education Materials Development



Inbound Programme



Philippines

Vietnam

Cambodia

Outbound Programme



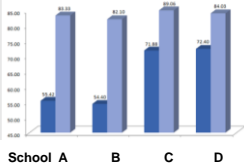
Malaysia

Cambodia

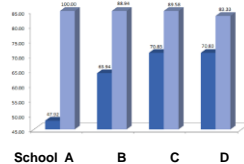
Thailand

Programme Outcome (2018)

Willingness for Mutual Exchange (Students)



Willingness for Mutual Exchange (Co-teachers)

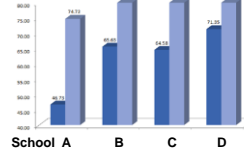


* Korean host schools where exchange teachers from the partner countries completed the educational activities through APTE in 2018

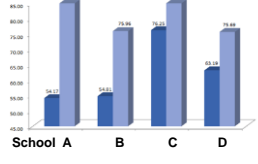
Before
After

Programme Outcome (2018)

Willingness for Global Citizenship (Students)



Willingness for Global Citizenship (Co-teachers)

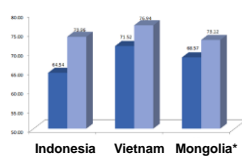


* Korean host schools where exchange teachers from the partner countries completed the educational activities through APTE in 2018

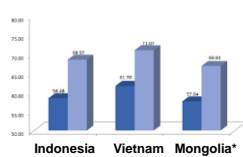
Before
After

Programme Outcome (2018)

Cultural Openness (Students)



Cultural Openness (Co-teachers)

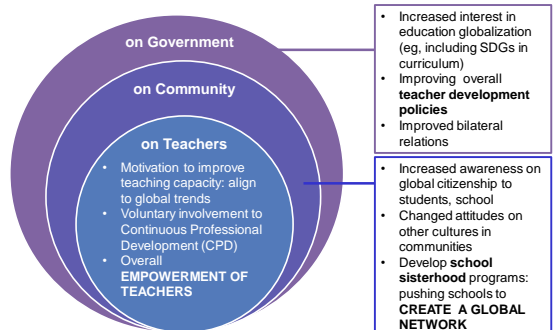


* Korean host schools where exchange teachers from the three countries completed the educational activities through APTE in 2018

Before
After

Conclusions, Suggestions (1)

What is the overall impact of Intl Teacher Exchange?



Conclusions, Suggestions (2)

What happens after the exchange?

- Sustainability: continued dialogue with home countries, continued exchange with schools, NEST (Network of Schools and Teachers)
- Best Practice: **Korea-Philippines Teacher Exchange Alumni Association launched** (annual forum held, with support of Philippines Dept of Education)
- **Commitment of government is key**



nest.unescoapceiu.org

Areas of Improvement

- Government-to-Government matching fund should be explored to increase ownership
- Closely related with need for governmental discussion on **recognition of qualifications in the teaching profession**
- Recommendation on Teacher Mobility needed (connection with International Teacher Task Force)



2018 Annual Forum of alumni from Korea-Philippines Teacher Exchange Programme

Conclusions, Suggestions (3)

Messages from Participating Korean Teachers

“ I want to tell future participants of the international teacher exchange programme that the **presence of teachers themselves can become (one of the greatest) classroom material.** ”



“ I have been a teacher for 30 years now. This (international teacher exchange programme) was an **opportunity for me to remind myself of why I wanted to become a teacher.** ”

Thank you!



www.unescoapceiu.org

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (AGCU)
初等中等教職員国際交流事業「多文化共生のための教育実践」
2019年2月23日(土)

地球市民教育と多文化共生

ー ユネスコが提唱する
多文化共生への教育イニシアティブ ー

小林 亮
(玉川大学 教育学部)
makoto@edu.tamagawa.ac.jp

今日の話題提供のテーマ

- 1. ユネスコの価値教育
- 2. 地球市民教育(GCED)の展望
- 3. 地球市民性育成の今日的意味

■ 1. ユネスコの ■ 価値教育

ユネスコ(UNESCO)は
「価値のナビゲーター」



ユネスコの価値教育 ー「国連の良心」としてー

- ユネスコは戦後70余年にわたり、その時代の人類社会が直面する問題を改善、解決するための指針となるさまざまな価値教育(Values Education)を提唱してきた。
- 代表的なユネスコの価値教育プログラム
 - 1) 「国際理解教育」(1953年～) EIU
 - 2) 「寛容の教育」(1995年) Tolerance
 - 3) 「平和の文化」(1998年) Culture of Peace
 - 4) 「万人のための教育」(2000年) Education for All
 - 5) 「文明間の対話」(2000年) Dialogue among Civilizations
 - 6) 「文化の多様性」(2001年) Cultural Diversity
 - 7) 「ESD」(2005～14年) Education for Sustainable Development
 - 8) 「地球市民教育」(2013年～) Global Citizenship Education
 - 9) 「文化の和解」(2013年～2022年) Rapprochement of Cultures

価値教育の準拠枠

- ユネスコの価値教育を支える歴史的文書として、2つの準拠枠がとくに重要である:
- 1) 国連「持続可能な開発目標」2015年(SDGs: Sustainable Development Goals)
- 2) ユネスコ21世紀教育国際委員会報告書「学習: 秘められた宝」1996年(Learning: Treasure Within)

持続可能な開発目標 (SDGs)

- 2015年9月 国連総会で「持続可能な開発目標」(SDGs)を採択。
- 17の優先的な開発目標と169のターゲットを設定。
- 目標4** すべての人々への包括的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。
- とくにターゲット4.7においてESD(持続可能な開発のための教育) GCED(地球市民教育)、平和の文化、文化の多様性の尊重など、ユネスコが展開してきた価値教育の理念を「質の高い教育」を保障する重要な指標として位置づけている。



持続可能な開発目標(SDGs)におけるESDとGCEDの位置づけ

- <SDGs ターゲット 4.7>
 - 「2030年までに、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するのに必要な知識やスキルを身につけられるようになること。とりわけ、持続可能な開発のための教育(ESD)、持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー間の公平、平和の文化と非暴力の推進、地球市民性、文化的多様性の尊重、持続可能な開発に向けた文化の貢献を通じて、この目標を実現していくこと。」
 - By 2030, ensure that all learners acquire the knowledge and skills needed to promote sustainable development, including, among others, through education for sustainable development and sustainable lifestyles, human rights, gender equality, promotion of a culture of peace and non-violence, global citizenship and appreciation of cultural diversity and of culture's contribution to sustainable development.

「学び」自体を持続可能なものにしてゆくこと

- ユネスコが提唱する生涯学習概念の意味
- ユネスコ21世紀教育国際委員会の報告書「「学習 — 秘められた宝」」(1996年)で提唱されている学習の4本柱
 - ①知ることの学び (Learning to know)
 - ②行うことの学び (Learning to do)
 - ③生きることの学び (Learning to be)
 - ④**共生することの学び (Learning to live together)**
- このうち①認識論、②倫理学、③存在論、は伝統的な哲学(=学問)の根本領域に属している。これに対し、④の「共生」は、21世紀的状况に対応した、新しい学びの意義と課題を指し示している。
- ⇒ **「多文化共生」の今日的意義!**

競争型ではなく共生型

- グローバル化の進捗に伴い、21世紀型スキル、国際バカロレア(IB)、グローバル・コンピテンシーといったグローバル人材育成の諸プログラムが開発されている。
- しかし、これら競争型の人材育成とあわせて、競争の負の側面をカバーするために「共生型」のグローバル人材育成が求められている。
- ユネスコの価値教育は、根本的にこうした**共生型のグローバル人材育成**をめざす教育イニシアティブである。→ **多文化共生のための人づくり**

2. 地球市民教育 (GCED)の展望

地球市民教育 (Global Citizenship Education)

潘基文(Ban Ki-moon)国連事務総長が2012年に出した「グローバル教育第一イニシアティブ」において、

- 1)世界的全児童の就学の実現
- 2)学習の質の改善
- 3)**地球市民意識の醸成**

を教育の重点目標として掲げたことを受け、ユネスコが2013年に発足させた新しい教育プログラム。



グローバル教育第一イニシアティブ Global Education First Initiative

- 「グローバル教育第一イニシアティブ」は、2012年に潘基文 前国連事務総長によって提唱された。



Global Education First Initiative
The UN Secretary-General's Global Initiative on Education



- この「グローバル教育第一イニシアティブ」において、1) 全員就学、2) 学習の質改善と並んで、3) 地球市民意識の醸成が教育の最重点目標とされた。

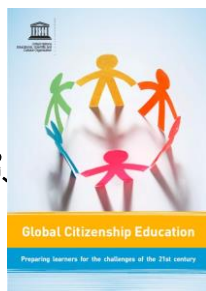
「グローバル教育第一イニシアティブ」 における教育の3つの最重点課題



- 全ての児童の就学 質の高い教育 地球市民性の育成

「地球市民教育」(GCED)の目的

- ＜ユネスコによる定義＞
- 「地球市民教育は、学習者の中に、人類社会全体が直面しているグローバルな諸課題に対して、地域の視点およびグローバルな視点の両方からよりよい解決の方策を考え、みずからそれに關わる動機づけを醸成する取り組みであり、またそれを通じて、より公正で、平和で、寛容で、安全で、持続可能な世界を実現するために**当事者として積極的な貢献ができる人を養成する教育の営みである。**」(UNESCO, 2014)



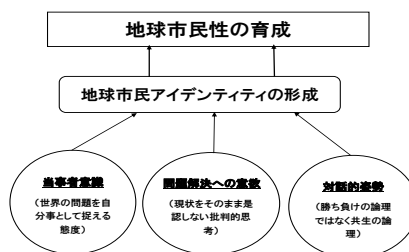
地球市民性とは何か

- 市民性(シティズンシップ)** → 社会の一員としての責任感と積極的関与。
- 地球市民性** → 人類社会全体を自らの内集団(「われわれ」として捉え、人類社会全体に当事者としての関心を持ち、そこで生じている諸問題の解決に向けて積極的に関わってゆこうとする態度とスキル。

地球市民性に求められる資質

- ユネスコの定義から、以下のことが読み取れる:
- 1) 地球市民性は、だれもが持つべき**普遍的な価値**として捉えられている。
- 2) **ローカルな視点とグローバルな視点**の両方が必要で、しかも両者の関連付けが重要。
- 3) 「地球市民」に求められる資質として、グローバルな諸問題に対する「**当事者意識**」と問題解決への「**積極的関与**」、そして「**対話的姿勢**」が強調されている。

地球市民性を構成する要因



地球市民教育の学習領域 (ユネスコによる発達モデル)

- 1) 認知的領域
- 2) 社会感情的領域
- 3) 行動的領域

これは学習課題のチャートであると同時に、**地球市民性に関する発達モデル**でもある。

- 学習の成果
- 学習者の特性
- 学習テーマ



地球市民教育における教育者の役割

- 地球市民性を次世代の心の中に育てていけるのは、教師の役割！
- 教師は、人のマインドセットを変えてゆける力を持っている。
- 学校教員は、地球市民教育の先導隊。
- ⇒ 教師自身がまず「よき地球市民」であることが必要。
- Q:では、「よき地球市民」とはどういう人ですか？ Who is a good global citizen?

葛藤解決スキル

- 地球市民性を構成する諸能力のうち、関与の対象としてとくに重要と思われるのは、異文化間(国家、民族、宗教)で生じている葛藤、対立を解決にもたらすスキル → **葛藤解決能力**。
- ただし、「葛藤解決」と言えるためには、係争・対立する当事者双方が「納得」することが不可欠。→ **相互性**

葛藤解決の前提(1):

1. 認知的領域:視点取得能力

- 異文化間の諸問題、国際間の葛藤について批判的思考を醸成するためには、**視点取得能力**(Perspective Taking)の獲得が、異文化間の対話および問題解決に向けた必要不可欠な認知的前提であると考えられる
- 視点取得能力 = 現実を、自分とは異なる他の視点、とくに自分と対立関係にある他者(外集団)の視点から見たどのように映るかを想像できる認知能力。
- 視点取得能力を持つことによって、**複眼的思考**が可能になる。学習者は自己中心および自民族中心の見方から解放され、よりバランスの取れた多面的な見方ができるようになる(**メタ認知**の獲得)。
- ピアジェの認知発達理論では、児童期(具体的操作期)に視点取得が可能になると言われるが、異文化間葛藤のような高次の複雑な認知課題に関しては、成人した後も視点取得は容易ではない？

視点取得能力を促進するための教育的介入

- <ロールプレイを通じた視点取得の実践>
- 異文化間の視点取得能力の醸成をめざすカリキュラム開発に関する有効なアプローチのひとつとして、ロールプレイがある:
- ロールプレイ = 学習者に、自集団と対立している「外集団」の視点を取って行なう演習を実践する方法。
- 1. 自らの価値観や立場とは対立する立場から、事態がどう見えているのかを知る。
- 2. その対立する立場の人間を自ら演じてみる。 Cf. 「模擬国連」の実践
- 例: キリスト教徒とイスラム教徒との間の対立
例: 日中韓(あるいはロシア)の歴史認識問題
- 異文化の視点を疑似体験するだけでなく、そもそも何が対立点なのか、異文化間葛藤において真に対立が発生しているのかを振り返り、分析する姿勢の獲得につながる(対立の本質に関する内省)。

2. 社会感情的領域: 地球市民アイデンティティの形成

- ユネスコのGCED発達チャートには、社会感情的領域における地球市民教育の学習課題として、「異なるレベルのアイデンティティに関する気づき」が挙げられている。
- 1) 個人的アイデンティティ (Personal Identity)
- 2) 地域アイデンティティ (Local Identity)
- 3) 国民アイデンティティ (National Identity)
- 4) グローバル・アイデンティティ (Global Identity)
- 自らに内在する異なるレベルのアイデンティティへの気づきは、**多元的アイデンティティ**を形成することを可能にする。
- しかし、①～③と異なり、④地球市民アイデンティティはこれまで学校教育において意識的な育成の対象となっていなかった。
- アイデンティティ教育のモデル転換の必要性！

地球市民アイデンティティと持続可能性

- 地球市民アイデンティティの視座を獲得することで、ESDが中心課題とする持続可能性の捉え方も根本的に変容することが期待される。
- そこで保障されるべき持続可能性は、人類全体の「自己実現」に向けた新しい価値の創出という側面を帯びてくる。
- 問: GCEDがめざす地球市民性というアイデンティティ教育の発達課題を導入することで、ESDの提示する持続可能社会のビジョンにどのような変容と拡大、深化が生じるでしょうか？



3. 行動的領域: 対話 (Dialogue)

- 地球市民教育の学習において醸成されるべき行動的能力の一つとして、「対話」の行為がある。
- 「対話」は、自分と立場の異なる他者への尊重(=文化的、民族的、宗教的、個人的多様性の尊重)があって初めて可能になる。Cf. 「主体的、対話的で深い学び」
- たとえば対立する立場の間で議論が平行線になる場合、対話を成り立たせるのは、視点取得による自己変容に對して開かれた態度。
- 「対話の場」としてのユネスコスクール(ASPnet: UNESCO Associated Schools Network)の可能性。



「対話」を促進するための教育的介入

- ＜共通の要因への気づきを高める＞
- 地球市民教育の行動的スキルである「対話」行為を促す方法として、学習者に、対立する国家、民族、宗教の間に共有されている文化的共通性(共通の根源)に対する気づきを高める手法が考えられる。
- 例1: キリスト教徒イスラム教に共通の宗教的遺産への気づき
- 共有された歴史と一神教的伝統(「アブラハムの宗教」として歴史的起源の共有、啓示宗教として「同じ神」への信仰)
- 例2: 東アジア諸国に共有された文化伝統の大きさへの気づき
- 仏教的世界観、儒教の伝統、漢字、学歴主義、家族観、祖先崇拝

葛藤解決に向けた「対話」を促進するためのワークシート案

- 日本と韓国にはそもそもどのような歴史があったのだろうか？
- 隣国である日本と韓国の間には2000年にわたる長い歴史があります。
- どのようなことがあったのでしょうか？

古代～中世～近世

近代～現代



ESDとGCED: ユネスコの2大基幹教育プロジェクト

- ＜ESDとGCEDの対照表＞

プロジェクト	ESD (Education for Sustainable Development) 「持続可能な開発のための教育」	GCED (Global Citizenship Education) 「地球市民教育」
発足	2005年	2013年
目的	持続可能な社会を作 てゆける人材育成	地球市民としての資 質の育成
関連領域	環境教育、開発教育	国際理解教育、心理学
主導国	日本、ドイツ など	韓国、インド など

ユネスコの見解

- ユネスコはガイドブック “Global Citizens for Sustainable Development”(2016) の中で、ESDとGCEDとは、置かれた課題文脈が同じであることを指摘している：
- 1. 全ての人を巻き込む地球的問題
 - 気候変動、紛争、ジェンダー不平等、環境悪化、自然資源の枯渇、過激主義、社会的対立、テロなど
- 2. ここからくる共通のニーズ
 - 1) 平和で持続可能な社会を築くこと
 - 2) 私たち人類がどう共生していくかについての根本的なモデルチェンジ(新たな共生モデルの構築)
- ESDとGCEDは、相互包括的關係！
- ⇒ 多文化共生のために両者が必要。

「ユネスコ週間」(UNESCO Week) 2017年3月6日～10日、オタワ



■3. 地球市民性育成の 今日的意味

今、なぜユネスコか？

- 世界中の国が内向きになり、対立と分断が顕著になってきた現在ほど、ユネスコの理念が必要とされている時代はない！
- 地球市民性
- 共生社会
- ↓
- 平和 &
- 持続可能性



しかし... 共生を妨げている要因

- <憎しみと不信感>
- → 人種間、民族間、国家間、宗教間
- → 地域紛争、テロ、国家間の緊張関係
- 世界の分断を生み出すこの不信感やトラウマを信頼と友情に変容させていくためには何か必要でしょうか？
- → ユネスコの価値教育は、負の遺産をポジティブな未来構築に変容していく取り組みの導き手となるものです。「平和のナビゲーター」

「文化の和解」

- 2008年の国連総会で、2010年を「文化の和解のための国際年」(International Year for the Rapprochement of Cultures)とすることを決議。
- これまで対立や葛藤関係にあった民族間、宗教間、文化間の対話を促進することにより「平和の文化」を実現してゆこうとするイニシアティブ
- 「平和の文化」を実現するためには、民族間、宗教間、文化間の「和解」が必要不可欠な前提条件である、という認識がある。

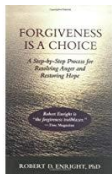


東アジアにおける「文化の和解」

- 戦後一貫して「過去の克服と和解」を国際理解教育の主要テーマにしてきたドイツをはじめとするEU諸国と比べ、日中韓を含む東アジアにおいて「文化の和解」のプロセスは立ち遅れている。
- 「文化の和解」は地球市民性の育成とも関わり、多文化共生を可能にする本質的な教育課題であるはず。
- 「文化の和解」をどのように学校教育の実践に導入していくか？

エンライトの「赦し」理論

- ロバート・エンライト(Robert Enright)による赦し(Forgiveness)に向けたプロセスモデル
- 『『赦し』はひとつの選択である。』
- 不当な相手を赦すという選択は自分が優位な立場にある時は容易。
- 「赦す」という選択をすることによって人は不安や抑うつを低減し、自尊感情と希望を高めることができる
- → 「赦す」というステップによって、相手に対してより高い次元での優位性を獲得することができるという事実への気づきをいかに促していくか？



実践例：欧州アラブ対話プロジェクト (Euro-Arab Dialogue)

- 2002年に発足。ヨーロッパとアラブの「文明間の対話」を促進するために開始されたユネスコスクールが多国間協同プロジェクト。
- ドイツ、イタリア、デンマークのユネスコスクールと、アラブ4ヶ国(パレスティナ、ヨルダン、レバノン、リビア)のユネスコスクールの交流セミナー(相互訪問)と対話による協同学習。
- アラブ人の生活の仕方、宗教、文化、政治や社会の現状などを、欧州の青少年がアラブの青少年との対話の中で多面的に学び、それを通じて欧州アラブ両文明間の相互理解を深めることを目的とする。
- 3言語(ドイツ語、アラビア語、英語)のインターネット・マガジン発行。
- 歴史的対立を孕む地域の青少年が直接出合い、対話する中で互いの文化の伝統と今日の状況を知ることによる意識の変容が目指されている。



ワークショップ

- 問1: あなたの教育実践において、地球市民性の育成や多文化共生の観点から、**成果**として挙げられるものは何ですか？
- 問2: あなたの教育実践において、地球市民性の育成や多文化共生の観点から、うまくいかなかったこと、**課題**として残ったことはありますか？
- 問3: これらをふまえ、「**よき地球市民**」とはどのような人でしょうか？

ご清聴ありがとうございました



中国政府日本教職員
招聘プログラムに参加して

～ 私を変えた 一週間 ～

徳島県 上板町立高志小学校
教諭 富樫未来

変化の背景

- I 中国研修にて
 - ①子どもたちとの出会い
 - ②驚きの学校設備
 - ③肌で感じた異国の文化
 - ④本物のすばらしさ
- II 悩み・苦悩
- III 目の前にいる子どもたちとの学び
- IV 世界（世の中）を見る

II 悩み・苦悩

負のスパイラルからの脱却

やりたいことをする

- ・自分がやりたいこと
- ・子どもがやりたいこと
- ・おもしろそうなこと
- ・楽しいこと
- etc...

失敗ではない

経験は全てが自分の力になる

III 目の前にいる子どもたちとの学び

やりたいことをしてきたら・・・

2月の子どもたちの様子（中国研修にて）



IV 世界（世の中）を見る

子どもたちには無限の可能性がある

【教師は】

- ◆可能性を広げる
- ◆子どもたちの好奇心を受け止める



最前線

を突っ走り

中心として支えていく

IV 世界（世の中）を見る

「世界を見てきなさい」



ご清聴ありがとうございました

地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題

国際交流事業に参加して



宮城県石巻市立鮎川小学校
教頭 畠山 政明

地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題


本校の先生方の学び

笑顔で言葉の壁を乗り越える

直接 触れ合うことの
効果を実感

文化の違いを
改めて実感

教師自らが世界に目を向け
学んでいく必要がある




地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題

児童の学び



また来て欲しい
踊りを今も覚えている
外国の子供たちとも
交流したい
外国への興味関心
が増した
様々な文化を受容
しようとする姿が
見られた

タイについて
興味を持った

地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題

タイの先生方との国際交流を経て

触れ合ってみて分かったこと

これまで継承してきた鮎川の伝統芸能

これまで触れたことのない外国の文化・芸能

良さを見つめ直す
自信と誇り

地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題

タイの先生方との国際交流を経て

これからの展望


グローバルな視点に
立った自信と誇り

異文化との
触れ合い

異文化との
触れ合い

異文化との
触れ合い

自信と誇り



地域・学校の概要

取組の概要

成果と課題

タイの先生方との国際交流を経て

これからの展望

目指す子供像

確かな学力

豊かな人間性

健康・体力

自ら進んで 学習する子	遠く 明るく 思いやりのある子	しょうがで がんばる子
よく聴き 最後まで待つ子	だれとでも なかよくする子	みんなと 先きにあそぶ子
自分で考え 進んで発表する子	友達の良いところを教え 明るく行動する子	安全に気を付け 必死を持って運動する子
自分の課題を見付け 追究する子	友達や下級生に 思いやりをもって接する子	自分のためだけでなく がんばる子

「悲しか」でも、「しない」でも、「ないがいい」でも 活躍できる「おとな」に



私が日印交流会に参加した理由

- **楽しそうだった**
(当時高校3年生の担任で進路指導の日々)
- 外国の方と**教育**について話す機会が欲しかった
- 勤務校の国際的な活動を展開するために、**他国の学校とつながる機会**が欲しかった

有馬高等学校の国際的な関わり

○プロジェクト

- Rice Project/Food Project (2013年～)
- #Plastic Challenge (2018年)

←現在、インドの学校とこの2プロジェクトを展開しようと試みている

外国の学校と交流することの難しさ

- **時差**や**年間行事**の違い
試験や教員の忙しい時期が違うため、なかなかスムーズに計画が進まない。
- **費用と時間**
実際に会って話すためには旅費とまとまった時間を捻出する必要がある。

外国の学校と交流することの良さ

- 生徒が**いきいき**と活動する
 - **外国語**や**他国の文化**をもっと学びたいと思う
 - 自分が**楽しい**と思うから**積極的**に関わる
- 内発的モチベーション**が上がる

生徒の変化

「韓国には悪い印象しかありませんでしたが、訪問して**印象が変わりました**。政治的には難しいかもしれませんが、これからは**韓国の友人たちとは仲良くしたいです**。」

「修学旅行で**価値観が変わりました**。
将来は**国際関係の仕事**に就きたいです。」



2015年
韓国派遣
プログラムに
参加して



東京都立石神井特別支援学校
(前任校：東京都北区立滝野川小学校)

町田 直美

【出前授業】
特別支援教育に必要なノウハウを中心に授業を展開

- ①視覚支援・・・イゴ ボセヨ
- ②モデル提示・・・イロツケ〜
- ③机間巡回・・・オッテヨ
- ④評価・・・チャレソヨ



小学校への土産授業①
2年生 文化交流 日本伝統行事『七夕飾り作り』体験
2017年10月授業

東京都立石神井特別支援学校
2017年8月 石神井特別支援学校訪問

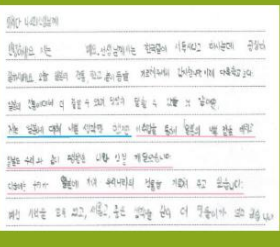


教材交流 日本から韓国へ



【継続していく大きな原動力】
プログラムでの交流授業（4年生）児童の感想文 2015年8月

私は日本に対して
悪い考えだけが あったのですが、
この授業を通じて、
日本の悪い点を捨て、
平凡な国であることに気がきました。
次に、私たちが日本に行って、
韓国の伝統を教えてあげたいです。
以前の記憶を全て忘れて
新しい、良い考えを
一緒に作って行ってみたいです。



【一歩から 一歩ずつ】
『始まりは半分』『千里の道も一歩から』
“シジャギ バニダ” “チョルリキルド ハンゴルムブト”

【出会い】 交 【歩み寄り】



3. 参加者アンケート

Feedback from participants

参加者アンケート

<目的>

第一回エキスパートミーティングに参加したプログラム運営者・専門家および、2018年度初等中等教職員国際交流事業「国際教育交流事業報告会&ワークショップ」に参加した教職員から本プログラムに対する意見を聞き、今後のプログラム計画・運営の参考にするため、実施するものである。

<アンケート調査>

- 調査時期：2019年2月
- 調査対象：第一回エキスパートミーティングおよび2018年度初等中等教職員国際交流事業「国際教育交流事業報告会&ワークショップ」に参加したエキスパート10人および2018年度初等中等教職員国際交流事業「国際教育交流事業報告会&ワークショップ」に参加した教職員15人。計25人。
- 調査方法：2019年2月23日（日）アンケート用紙を対象者25人に配付し、プログラム終了後回収した。
- 回収結果：配付した25人中17人から回収した（回収率68%）

<調査内容>

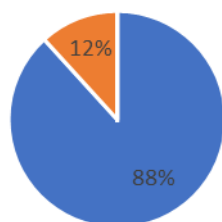
- 報告会&ワークショップ全体の満足度
- 個別のプログラムの満足度
- プログラム運営についての満足度
- 感想や印象に残ったこと
- 今後の海外教職員訪問団を受け入れへの関心（日本教職員のみ）
- 今後の日本教職員の海外派遣プログラムへの参加への関心（日本教職員のみ）
- その他（改善点や意見・要望等）

◎掲載にあたり、理由・意見等の記述部分は一部抽出した。

●質問 1. 全体的な満足度

(教職員アンケート有効数：10、エキスパートアンケート有効数：7)

全体満足度

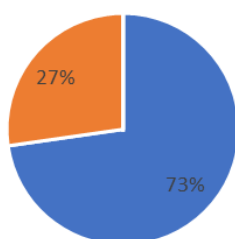


■ A: Excellent ■ B: Good ■ C: Ok
■ D: Not Good ■ E: Bad

教職員は全員「非常に満足」と答えた。7割のエキスパートが「excellent」と答え、残りは「good」と答えた。

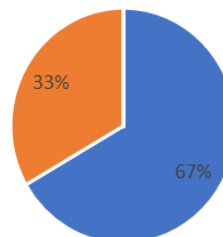
●質問 2-1. 個別のプログラムの満足度（教職員）

講演A



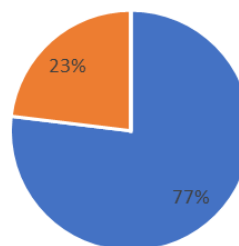
■ A: 非常に満足 ■ B: どちらかといえば満足
■ C: どちらかといえば不満 ■ D: 非常に不満

講演B



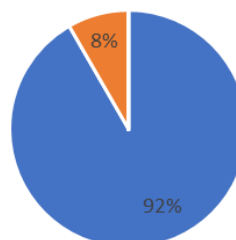
■ A: 非常に満足 ■ B: どちらかといえば満足
■ C: どちらかといえば不満 ■ D: 非常に不満

講演C



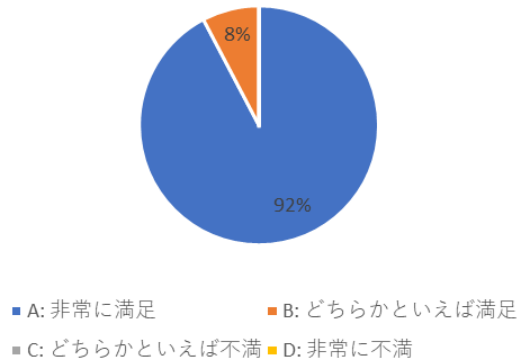
■ A: 非常に満足 ■ B: どちらかといえば満足
■ C: どちらかといえば不満 ■ D: 非常に不満

プログラム参加者、訪問校からの報告

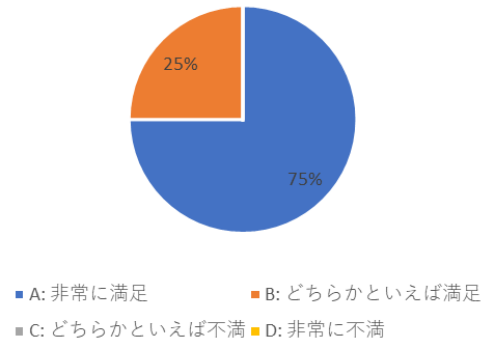


■ A: 非常に満足 ■ B: どちらかといえば満足
■ C: どちらかといえば不満 ■ D: 非常に不満

ワークショップ



エキスパートからのコメント

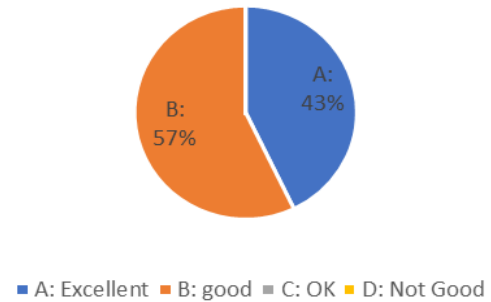


六つのプログラムに対して、いずれも「非常に満足」か「どちらかといえば満足」と評価された。

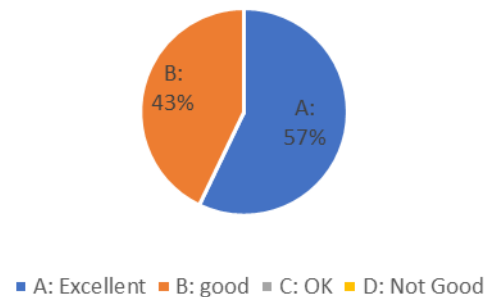
●質問 2-2. 個別のプログラムの満足度（エキスパート）（アンケート有効数：7）

① Expert Meeting

Country Reports

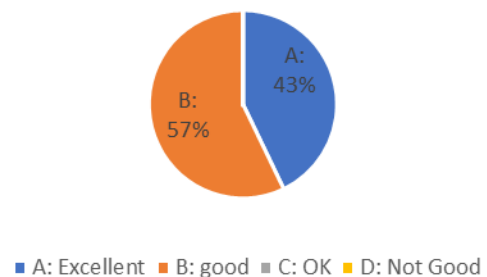


Open Questions

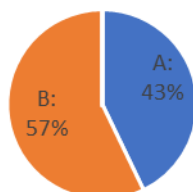


② Conference on International Teachers Exchange Programme

Key Note Speeches and Lectures

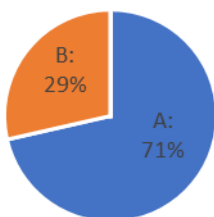


Reports by Participants of Programmes



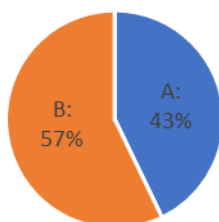
■ A: Excellent ■ B: good ■ C: OK ■ D: Not Good

Workshop



■ A: Excellent ■ B: good ■ C: OK ■ D: Not Good

Comments by Experts



■ A: Excellent ■ B: good ■ C: OK ■ D: Not Good

●質問 5. プログラムの中で、印象に残ったことや感想

(アンケート有効数: 18)

・国連人権宣言の理念を教育目標の柱にしているので、今日の講演の主旨が本校の日常の活動と合致し、勇気を頂きました。報告会は皆さんの経験が今後の活動意欲に繋がっていることが確認でき、嬉しくなりました。

・ワークショップはとても有意義でした。自分の視野も少し広がったと思います。いろいろな考えを聞くことはとても大切なことだと再認識しました。

・とても有意義だったのですが、エキスパートの方々のコメント一言一言が重く、受け止めるのに時間がかかりました。もっとお休みがあっても良いですね。

・同じ考えをお持ちの先生方と交流することができ、良かったです。本校なりの国際交流を進めていく原動力となりました。

・特別支援教育の町田先生とお話ができ、今後の自分の指導、支援や ESD の取り組みに生かしていきたいと思いました。

・地球市民教育における成果・課題を検討する中で、イマ・ココ (where we are) を正直に見つめることの意義を再認識しました。海外研修やイベントごとをするだけでは、他者理解ができるようにはなりません。隣に座っているクラスメイト、同じ地域に住む人、身近にいる多様な人々を理解し、共存できているのでしょうか。イマ・ココを見つめ直し、大切にすることができる「私たち」であるために、行動を変え、更新し続けていきたいと思っています。

・このような会で自分の関わったことを発表させてもらえて、さらに頑張ろうという気持ちになりました。改めて、教員に関わっていることに誇りを持つことができました。子供たちの学びがこれからも楽しみです。

・2018年度の韓国教職員派遣プログラムに参加させていただき、帰国後に実際に先生方が取り組まれた内容について詳しく知ることが出来て良かったです。現場で実践するに当たって上手くいっていることばかりでなく、苦労していることについても赤裸々にお話していただき、私自身も現在の勤務校では個人的に細々と実践をしているだけでしたので大変励みになりました。

・様々な職種、校種、国籍の方たちの貴重な意見を聞けるいい機会であった。普段なかなか聞くことのできない話を聞いたり議論できたりして有意義な時間になったと思う。

・実践発表、基調講演、小グループでの対話をバランスのとれたワークショップである。もう少し対話の時間があってもよかった。

・ Expert Meeting was a good opportunity to get idea for developing the invitation programme. Shared the ideas with Japanese teachers and get ideas that I can develop in the workshop.

・ The meeting has built the network among the experts. Experts have an opportunity to exchange their opinion and recommendation on the programme in terms of benefits, advantages, etc.

●質問 7. プログラムの中で、他にどのような活動があったらよいか、プログラム改善のための提案

(アンケート有効数：13)

・とにかくたくさんの人に知ってもらうようにする。たくさんの人が活動や研修、プログラムに参加してほしいと思います。

・各国の学校の状況や各国に対する様々な疑問に対する対話の時間をとって良いように思う。

・自分たちの教育活動を振り返る企画を今後も続けていただきたいです。

・もっと事例報告も聞きたいです。

・ Designing the contents for the teachers exchange programme with different perspectives from different countries.

・ Deep and long conversation with policy maker and principals. To visit schools and learn through practice.

付録

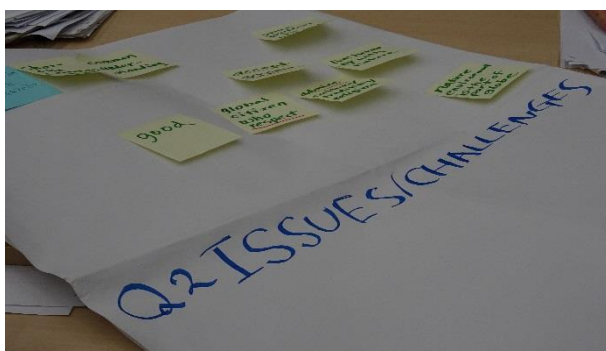
Annex

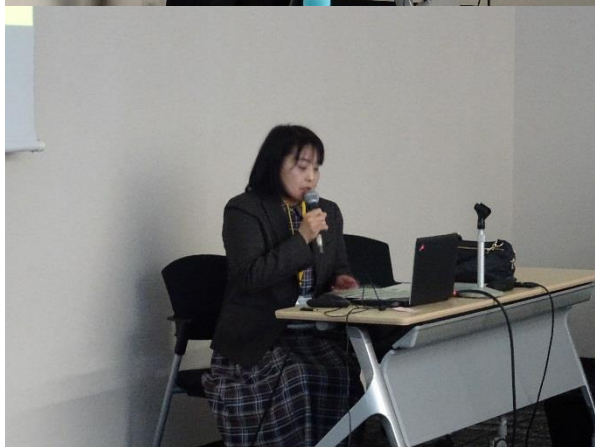
1st Expert Meeting





2018-2019 Conference on International Teachers Exchange Programme









参加費
無料

地球市民
教育

ESD

変容

多様性をちからに

教育実践者による国際理解とは

初等中等教職員国際交流事業

報告会&ワークショップ

日時

2019年2月23日 | 土 |
午前9時30分～午後17時00分(受付9時10分)

場所

ベルサール八重洲 RoomE
(〒103-0028 東京都中央区八重洲1丁目3-7 八重洲
ファーストフィナンシャルビル2, 3階)

定員

先着40名



募集
要項

右のQRコードまたは下記のURLから
募集要項をダウンロードしてください。
<http://www.accu.or.jp/jp/news/detail.php?nid=739>



お問い合わせ
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
TEL: 03-5577-2853 Mail: accu-exchange_ml@accu.or.jp

会場までのアクセス:
「日本橋駅」A7出口 直結 (東西線・銀座線・浅草線)
「東京駅」八重洲北口 徒歩3分 (JR線・丸ノ内線)

2018 年度初等中等教職員国際交流事業プログラム実績

2018-2019 Programme Records on International Teachers Exchange Programme

国名	種別	期間	訪問地	人数
中国	派遣	2018 年 6 月 3 日～6 月 9 日	北京市、甘肅省、上海市	25
韓国	派遣	2018 年 7 月 10 日～7 月 16 日	ソウル特別市、慶尚南道（昌原）、蔚山広域市、釜山広域市	49
タイ	派遣	2018 年 8 月 26 日～9 月 1 日	バンコク、 ナコンサワン、アユタヤ	5
インド	招へい	2018 年 10 月 7 日～10 月 14 日	東京都、神奈川県、山梨県	14
中国	招へい	2018 年 11 月 4 日～11 月 10 日	東京都、福岡県大牟田市	25
タイ	招へい	2018 年 11 月 27 日～12 月 3 日	東京都、宮城県	15
韓国	招へい	2019 年 1 月 22 日～1 月 28 日	京都府、奈良県奈良市、大阪府、奈良県、兵庫県	96

Country	Type	Duration	Venue	Number of participants
China	Dispatch	3 rd -9 th Jun. 2018	Beijing, Gansu Province, Shanghai	25
Korea	Dispatch	10 th -16 th Jul. 2018	Seoul, Gyeongsangnam-do (Changwon), Ulsan, Busan	49
Thailand	Dispatch	26 th Aug. - 1 st Sep. 2018	Bangkok, Nakhon Sawan, Ayutthaya	5
India	Invitation	7 th -14 th Oct. 2018	Tokyo, Kanagawa, Yamanashi	14
China	Invitation	4 th -10 th Nov. 2018	Tokyo / Omuta, Fukuoka	25
Thailand	Invitation	27 th Nov.-3 rd Dec. 2018	Tokyo, Miyagi	15
Korea	Invitation	22 nd -28 th Jan. 2019	Kyoto / Nara City / Osaka, Nara, Hyogo	96

文部科学省委託 平成30年度初等中等教職員国際交流事業

第1回 エキスパートミーティング・

初等中等教職員国際交流事業報告会&ワークショップ 実施報告書

2019年3月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

©2019 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)